

## 2025年度（後期）学業成績優秀表彰

【大阪公立大学】

学部	学科	氏名
現代システム科学域	知識情報システム学類	横田 フェルナンド拓哉
現代システム科学域	環境社会システム学類	星加 真奈
現代システム科学域	教育福祉学類	天野 竜也
現代システム科学域	心理学類	北田 真楓
文学部	哲学歴史学科	伊藤 美桜
文学部	人間行動学科	田中 亮多
文学部	言語文化学科	木下 英寿
文学部	文化構想学科	橋本 満里奈
法学部	法学科	坂井 亜弥華
経済学部	経済学科	黒木 基成
商学部	商学科	河根 光来
商学部	公共経営学科	小久保 風希
理学部	数学科	宮口 陽邑
理学部	物理学科	松久保 尚暉
理学部	化学科	吉川 優大
理学部	生物学科	東 晃大
理学部	地球学科	富満 千尋
理学部	生物化学科	堀 更咲
工学部	航空宇宙工学科	田上 満喜
工学部	海洋システム工学科	札幌 勇守
工学部	機械工学科	村上 将梧
工学部	建築学科	八木 菜由子
工学部	都市学科	松下 賢世
工学部	電子物理工学科	溝口 武竜
工学部	情報工学科	高石 康世
工学部	電気電子システム工学科	田中 智也
工学部	応用化学科	須志原 治輝
工学部	化学工学科	倉田 佳奈
工学部	マテリアル工学科	皆藤 広輝
工学部	化学バイオ工学科	澤 春那
農学部	応用生物科学科	増田 桜
農学部	生命機能化学科	都築 歩香
農学部	緑地環境科学科	谷 菜乃実
医学部	リハビリテーション学科	渡辺 沙希
看護学部	看護学科	渡邊 美樹
生活科学部	食栄養学科	坪田 佳乃
生活科学部	居住環境学科	今岡 千幸
生活科学部	人間福祉学科	谷口 奈未

## 2025年度（後期）学業成績優秀賞

【大阪市立大学】

学部	学科	氏名
医学部	医学科	福井 緑

## 2025年度（後期）白鷺賞

【大阪府立大学】

学域	学類	氏名
生命環境科学域	獣医学類	白須 玲佳

## 2025年度（後期）研究業績優秀表彰

【大阪公立大学】

所属	専攻	氏名
現代システム科学研究科	現代システム科学専攻	三石 宏大
文学研究科	哲学歴史学専攻	梅原 七海
文学研究科	人間行動学専攻	村上 那由汰
文学研究科	言語文化学専攻	野坂 咲花
文学研究科	文化構想学専攻	村上 真子
法学研究科	法学政治学専攻	加藤 唯一
法学研究科	法曹養成専攻	井出 陽介
経済学研究科	経済学専攻	翟 紫涵
経営学研究科	グローバルビジネス専攻	内匠屋 快都
都市経営研究科	都市経営専攻	小松 大祐
情報学研究科	基幹情報学専攻	北谷 嘉規
情報学研究科	学際情報学専攻	小村 風我
理学研究科	数学専攻	福井 耀斗
理学研究科	物理学専攻	佐久間 駿
理学研究科	化学専攻	山田 恭佑
理学研究科	生物学専攻	小林 龍太郎
理学研究科	地球学専攻	大原 脩也
理学研究科	生物化学専攻	尾本 健太
工学研究科	航空宇宙海洋系専攻	大崎 歩乃花
工学研究科	機械系専攻	寺田 久雅
工学研究科	都市系専攻	小谷 渉
工学研究科	電子物理系専攻	山崎 滉太
工学研究科	電気電子系専攻	西井 翔馬
工学研究科	物質化学生命系専攻	今井 奎太郎
工学研究科	量子放射線系専攻	田中 龍太郎
農学研究科	応用生物科学専攻	永澤 藍香
農学研究科	生命機能化学専攻	高橋 央樹
農学研究科	緑地環境科学専攻	久井 花恋
医学研究科	医科学専攻	河野 沙紀
リハビリテーション学研究科	リハビリテーション学専攻	中村 まい香
看護学研究科	看護学専攻	下塩入 美香
生活科学研究科	生活科学専攻	水谷 有紀子

2025年度後期学長表彰（個人）

【大阪公立大学】

所属	氏名	功績
現代システム科学研究科	A E R F A T E A B U L I K E M U	研究活動
現代システム科学研究科	奈良岡 愛梨	研究活動
現代システム科学研究科	三石 宏大	研究活動
現代システム科学研究科	M I T S U I C L E O N E	研究活動
文学研究科	小嶋 健斗	研究活動
経営学研究科	福田 雄介	研究活動
情報学研究科	小西 豪	研究活動
情報学研究科	田中 紀行	研究活動
情報学研究科	江種 大希	研究活動
理学研究科	田中 仁一朗	研究活動
理学研究科	佐久間 駿	研究活動
理学研究科	吉川 真太郎	研究活動
理学研究科	高柳 史奈	研究活動
理学研究科	山田 恭佑	研究活動
理学研究科	平野 誠人	研究活動
理学研究科	野村 周平	研究活動
理学研究科	川端 凌弥	研究活動
理学研究科	北野 真有	研究活動
理学研究科	懸山 裕希矢	研究活動
理学研究科	小林 永慈	研究活動
理学研究科	水嶋 朱里	研究活動
理学研究科	巽 彩名	研究活動
工学部	田上 満喜	研究活動
工学部	高石 康世	研究活動
工学研究科	桂田 吏輝	研究活動
工学研究科	逢坂 惇志	研究活動
工学研究科	大崎 歩乃花	研究活動
工学研究科	松浦 英明	研究活動
工学研究科	山邊 晃瑠	研究活動
工学研究科	市川 亮大	研究活動
工学研究科	牛田 廉	研究活動
工学研究科	樋口 芽以	研究活動
工学研究科	梶加 拓海	研究活動
工学研究科	谷 達哉	研究活動
工学研究科	山東 美心	研究活動
工学研究科	福本 雄大	研究活動
工学研究科	森原 淳	研究活動
工学研究科	岡田 淳之	研究活動
工学研究科	小島 和繪	研究活動
工学研究科	山本 舜大	研究活動
工学研究科	吉松 真宏	研究活動
工学研究科	井上 達貴	研究活動
工学研究科	太田 翔心	研究活動
工学研究科	宮地 雄輝	研究活動
工学研究科	山下 美里	研究活動
工学研究科	松本 大輝	研究活動
工学研究科	富士 海斗	研究活動
工学研究科	浮田 紗希	研究活動
工学研究科	宮地 龍一	研究活動
工学研究科	橋井 貴士	研究活動
工学研究科	今井 奎太郎	研究活動
工学研究科	上永 誠人	研究活動
工学研究科	西里 栄毅	研究活動
工学研究科	朝倉 大智	研究活動
工学研究科	鳥居 真人	研究活動
工学研究科	土居 勇太	研究活動
工学研究科	入井 駿	研究活動
工学研究科	福田 侑真	研究活動
工学研究科	和田 佳成太	研究活動
工学研究科	山本 幸永	研究活動
工学研究科	井上 義文	研究活動
工学研究科	今吉 優輔	研究活動
工学研究科	土岐 雄人	研究活動
工学研究科	G E B R E K I D A N M E L E S Z E N A W I	研究活動
工学研究科	平山 優佳	研究活動
工学研究科	津山 紗江里	研究活動
農学部	根本 雅弥	研究活動
農学研究科	松本 朋子	研究活動
農学研究科	永井 翔大	研究活動
農学研究科	小林 春香	研究活動
農学研究科	永澤 藍香	研究活動
農学研究科	久米 琴音	研究活動
農学研究科	高橋 央樹	研究活動
農学研究科	三枝 直樹	研究活動
農学研究科	安倍 亮太	研究活動
農学研究科	岸本 里菜	研究活動
農学研究科	久井 花恋	研究活動
農学研究科	弘岡 拓人	研究活動
獣医学研究科	高見 優生	研究活動
獣医学研究科	志々田 康平	研究活動
リハビリテーション学研究科	上野 慶太	研究活動
リハビリテーション学研究科	大川 阿紀子	研究活動
リハビリテーション学研究科	藤原 志帆	研究活動
生活科学研究科	王 曉銳	研究活動
生活科学研究科	北村 和津	学業
生活科学研究科	濱崎 友翔	研究活動
生活科学研究科	野田 彩加	研究活動
生活科学研究科	上江洲 恵梨	研究活動
生活科学研究科	肖 雄	研究活動

他3名

【大阪市立大学】

所属	氏名	功績
文学研究科	王 青	研究活動
医学研究科	藤仁朝格吐	研究活動

他1名

【大阪府立大学】

所属	氏名	功績
工学域 機械系学類	山本 航平	研究活動
獣医学類	上山 さくら	研究活動

2025年度後期学長表彰 (団体)

【大阪公立大学】

所属	構成員	団体名	功績
経済学部	鍵福 朋応	経済学部・岡澤ゼミ：Aチーム	研究活動
経済学部	中野 愛弓	経済学部・岡澤ゼミ：Aチーム	研究活動
工学研究科	今本 光祐	Team AAM	研究活動
工学部	岡野 友哉	Team AAM	研究活動
工学研究科	進士 景星	Team AAM	研究活動

他1名

◇学長表彰に係る学生の学業並びに研究活動等の功績

<個人>

【大阪公立大学】

学部・学科 Faculty・Department 学域・学類 College・School 研究科 Graduate school	氏名 Name	推薦理由・成績(功績の内容) Reasons for Recommendation	【学会等における受賞等の場合に記入】 国際大会または国内大会 International competition or National competition ／(開催年月日 date)	その他参考事項 Others ※学術誌であれば、タイトルや大表の掲載・概要などを記載してください If it is an academic journal, please include the title, scale and outline of the conference, etc.
現代システム科学研究科	AERFATE ABULIKEMU	<p>右記の国際会議において行った口頭発表が、優れた内容であると評価を受け「Young Scientist Award (奨励賞)」を受賞した。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・標題「Sonochemical degradation of CCl<sub>4</sub> in alcohol-water system」</li> <li>・内容：新たな環境技術の開発および高温・パルの化学作用の解明を目的として、揮発性有害有機化学物質である四塩化炭素 (CCl<sub>4</sub>) の超音波分解について検討した。アルコール-CCl<sub>4</sub> 前処理溶液を用いることにより、CCl<sub>4</sub> の分解速度の促進に成功した。口頭発表が、優れた内容であると評価を受け、奨励賞を受賞した。</li> <li>・評価を受けた点：奨励賞は、当該年度の討論会で発表された口頭発表あるいはポスター発表の内、優秀なものとし、次の選考基準を定める。</li> </ul> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 「優秀」の基準：研究内容及び成果の理解度、発表技法等を評価する。</li> <li>2) 原則として、若手研究者を表彰対象とする。若手研究者とは、年齢が受賞の年度末3月31日現在において満35歳以下の者をいう。同点の場合には学生会員を優先する。</li> </ol>	6th Meeting of the Asia-Oceania Sonochemical Society (AOSS-6, 2025) in conjunction with 34th Annual Meeting of the Japan Society of Sonochemistry (JSS-34) (2025/12/5)	<p>【学会概要】 AOSSは2年に1回、産官学を問わず、ソノケミストリー分野に関する研究成果の発表、議論を行う国際会議です。JSSは1年に1回、産官学を問わず、ソノケミストリー分野に関する研究成果の発表、議論を行う全国規模の学会です。2025年度はAOSSとJSSが合同で開催された。</p> <p>【規模】 参加者数：約100人 奨励賞対象者の発表数：36件 (ポスター発表含む) 口頭発表奨励賞受賞者数：4名 ポスター発表奨励賞受賞者数：6名</p>
現代システム科学研究科	奈良岡 愛梨	博士前期課程1年次に筆頭著者・責任著者として執筆した論文が、国際誌Evolutionary Behavioral Sciences誌に掲載決定した。		<p>【論文】 著者: Naraoka, A. &amp; Kawamura, Y. タイトル: Does Extreme Altruism Prompt Anticipation of Norm Violations? 掲載雑誌: Evolutionary Behavioral Sciences</p>
現代システム科学研究科	三石 宏太	<p>日本社会心理学会において優れた研究計画を提出した者に贈られる「若手研究者奨励賞」を受賞した。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・標題「互恵性による格差拡大メカニズムの解明: 関係形成過程に着目した検討」</li> </ul>		日本社会心理学会は1500名程度の会員が所属する学術団体であり、日本社会心理学会若手研究者奨励賞は、書類選考により優れた研究計画を提出した応募者に贈られる。2025年度は31件の応募があり、うち7名がこの賞を受賞した。
現代システム科学研究科	MITSUI CLEONE	<p>筆頭著者・責任著者として執筆した論文が、国際誌Japanese Psychological Research誌に掲載決定した。</p> <p>社会心理学会の最大規模の国際学会であるSociety for Personality and Social Psychologyの年次学会にて、近年は毎年数名しか受賞者のいないInternational Travel Award (\$850)を受賞した。</p>		<p>【論文】 著者: Mitsui, C. &amp; Kawamura, Y. タイトル: Playing it safe? Voters decide politicians' not answering as an answer 掲載雑誌: Japanese Psychological Research doi: https://doi.org/10.1111/jpr.70019 【学会概要】 年に行われる、社会心理学・パーソナリティ心理学の最大規模の国際学会。3,500-4,000人が参加。ポスター発表は1,500-2,000件程度。2024年大会では15人、2025年大会では18人が受賞 (2026年大会での受賞者数はまだ公開されていない)。</p>
文学研究科	小嶋 健斗	<p>被推薦者は、倭王権の列島への波及過程を研究テーマとし、全国の大形前方後円墳を分析する一方、会津盆地をケーススタディとして取り組む。研究生であった2024年に会津坂下町・雷神山1号墳、前期博士課程1年目の今年度、会津若松市・飯盛山古墳と宮多方市・虚空蔵山古墳の測量調査を実施した。雷神山1号墳の調査成果は『福島考古』に発表し、倭国王墓である行燈山古墳の複製であることを明らかにした。飯盛山古墳については日本考古学協会におけるポスター発表に採択されている。自らの研究資料を整えるため、地元教育委員会と調整し、他大学の学生とともに学生主体の測量調査を実施する企画力・実行力は特筆に値する。重要古墳の測量図の整備は地域貢献の上でも意義深く、各市町の期待も大きい。</p>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・「会津坂下町雷神山1号墳の測量調査」(『福島考古』第67号、25年11月、47～58頁)。福島考古学会は1955年創設の、地域における考古学会のなかでも古い伝統ある学会で、会誌『福島考古』の評価は高い。</li> <li>・ポスター発表 (募集30件) : 2026年5月23・24日の第92回大会 (青山学院大学)。参加者数: 300人程度、会員数約3700名の日本最大の考古学会である。</li> </ul>
経営学研究科	福田 雄介	<p>国際会計研究学会の学会誌である『国際会計研究学会年報』2024年度第2号 (65-88頁) に掲載された査読論文「我が国における会計基準の相互承認戦略の形成過程—アクター・ネットワーク理論を視座として—」が高い評価を受け、2025年8月30日に当該学会より、「国際会計研究学会奨励賞」を受賞した。</p> <p>標題: 「我が国における会計基準の相互承認戦略の形成過程—アクター・ネットワーク理論を視座として—」</p> <p>内容: 本稿は、2000年代前半の我が国における国際会計基準への対応策である「相互承認戦略」の形成過程を、アクター・ネットワーク理論における「翻訳」の概念を分析上の視座として、国内外の多種多様な要素とそれらの相互作用、そうした相互作用が発生する仕組みや変化の過程に着目して分析し、当該戦略の形成が経団連による翻訳の結果であることを明らかにした。</p>	国際会計研究学会第42回研究大会/ (2025/8/30)	<p>【大会概要】 年に1回、研究者を中心に国際会計分野に関する研究成果の発表・議論を行う全国規模の学会です。</p> <p>【規模】 会員数: 500人 掲載論文数: 6本、うち査読論文2本 (投稿論文5本) 受賞者数: 2名</p>
情報学研究科	小西 薫	<p>右記 (その他参考事項に記載) の国際学術雑誌に筆頭著者として提出した論文が、査読のうえ、採択された。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・タイトル「Fairness via fuzzy systems: Analysis of accuracy-fairness trade-off by multi-objective fuzzy genetics-based machine learning」</li> <li>・内容 進化計算を応用した機械学習手法により、精度と公平性を考慮したファジィシステムを設計し、得られたモデルを詳細に解析した。実世界データセットを用いた数値実験により、ファジィシステムが本質的に解釈可能かつ公平なモデルとして有用であることを示し、また、公平なAI設計に資するいくつかの知見を提示した。</li> </ul>		<p>【論文誌名】 IEEE Transactions on Fuzzy Systems 【論文誌規模】 ファジィ理論とその応用に関する内容を取り扱う計算知能分野のトップジャーナルであり、IEEEが発行しています。Impact Factorは、11.9 (2026/1/23時点) です。また、scopusのtop 1%論文でもあります (URL: https://www.scopus.com/sourceid/24242)。</p>

情報学研究科	田中 紀行	<p>右記の国際ワークショップにおいて行った口頭発表が、特に優れた発表であると評価を受け「Presentation Award」を受賞した。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 標題「FocusSense: Construction and Evaluation of a Multimodal Concentration Estimation Application」</li> <li>・ 内容「本研究は、COVID-19により普及したオンライン授業における学生の集中度を客観的に評価するため、ウェブカメラやウェアラブルから取得した視線・表情・動作・心拍などのマルチモーダルデータを収集し、機械学習・深層学習により集中状態を推定した。さらに、結果を直感的に提示する可視化アプリを開発し、学生の自己省察や教員の授業改善を支援した。評価実験ではジョン開発システムの有用性・有効性が確認され、今後の改善課題も明らかになった。本研究は、センシングと可視化を融合した新しい教育支援手法として、オンライン学習の質的向上に寄与するものである。」</li> <li>・ 賞の概要：国際ワークショップ内で発表された口頭発表から、特に優れた発表を行なった数件に対して授与される賞。</li> <li>・ 田中くんは、スマートプラットフォーム研究グループ（指導教員：藤本まなと准教授）に所属しており、オンライン学習環境での学生の集中度把握に関する研究を行い、上記の通り2025年8月31日-9月3日に開催された宮城県仙台市秋保温泉ホテルセンターにおいて開催された19th International Workshop on Informatics (IWIN2025)において、評価委員による厳正なる採点評価において高く評価され、「Presentation Award」を受賞した。</li> </ul>	19th International Workshop on Informatics (IWIN2025) (2025/8/31-9/3)	<p>【国際シンポジウムの概要】</p> <p>IWIN2025は、情報学およびコンピュータネットワーク分野における最先端の研究成果と革新的なアイデアを研究者・専門家が一同に持ち寄り、活発な議論と交流を行う国際学術フォーラムである。本ワークショップでは、分野横断的な知見の共有や新たな共同研究の創出が期待されており、情報学研究の未来を切り拓く重要な場となる。今年の参加者は42名であり、26件の口頭発表が行われた。</p> <p>受賞情報：http://www.infsoc.org/conference/iwin2025/award</p>
情報学研究科	江種 大希	<p>右記の国際会議において採択された論文が、学生主著の論文において最も高い評価であるとの認定を受け「Best Student Paper Award」を受賞した。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 標題：Evaluation of 3-Dimensional In-Body Device Localization Using Machine Learning Algorithms with Reduced Training Data</li> <li>・ 内容：近年、健康長寿社会の実現に向けて、人体内で人に代わって動作する体内サイバネティック・アバター（in-body CA）の研究が進められている。これらは埋め込み型デバイスから構成されるため、体内における正確な位置把握が重要である。本研究では、磁場を用いた体内デバイスの位置推定手法を提案し、人体を模擬したファントム環境において、複数の機械学習手法による位置推定精度を比較・評価した。さらに、学習データ収集の負担軽減を目的として、学習データ量と推定精度との関係を分析し、必要なデータ量の削減可能性について検討した。本論文は、これらの検討結果をまとめた国際会議論文である。</li> <li>・ 賞の概要：国際会議BodyNets2025に採択された論文の中から、学生が主著の論文において最も高い評価を受けた論文に授与される賞。</li> <li>・ 江種くんは、スマートプラットフォーム研究グループ（指導教員：藤本まなと准教授）に所属しており、磁場を用いた体内デバイス位置推定手法に関する研究を行い、上記の通り2025年12月2日-12月4日に開催された岡山県岡山山岡山コンベンションセンターにおいて開催された20th EAI International Conference on Body Area Networks (BODYNETS 2025)において、評価委員による厳正なる採点評価において高く評価され、「Best Student Paper Award」を受賞した。</li> </ul>	20th EAI International Conference on Body Area Networks (BodyNets 2025) (2025/12/02-12/04)	<p>【国際会議の概要】</p> <p>BodyNets 2025は、European Alliance for Innovation (EAI) が主催する国際会議であり、人体内外およびその周辺環境における情報通信、生体計測、センサ信号処理等を主な対象分野とする著名国際会議である。BodyNetsは、ヨーロッパ、アメリカ、アジアを含む世界各地で開催されており、工学分野および医療分野の研究者が幅広く参加する学際的な国際会議であり、今年の参加者は102名、参加国数は8カ国であり、厳選された40件の口頭発表が行われた。</p> <p>会場情報： https://bodynets.eai-conferences.org/2025/</p>
理学研究科	田中 仁一朗	<p>右記の論文1が査読付きの国際的学術誌・Hiroshima Mathematical Journalに掲載決定された。</p> <p>また、多変数関数論分野で東アジアを中心に多数の当該分野第一人者が一堂に会した国際集会である集会2に於いて招待講演者となり講演発表を行った。さらに、多少期間からは外れるもののKyungpook National Universityで開催された国際集会3では、Award for Presentation Excellenceを受賞している。</p> <p>以上はいずれも、二次元トイダル群と呼ばれる複素解析幾何学的対象に於ける独自の研究成果及びその成果の分野外研究者へのプレゼンテーション能力が評価されたものであり、表彰に値すると考えられる。</p>	<p>2. On Bott–Chern and Aeppli cohomologies of <math>S^{2n}</math>-dimensional toroidal groups, Conference on Several Complex Variables --- L2 Estimates and Extensions, Tohoku University, (September 22nd-26th, 2025), <a href="https://takahiro-ina.github.io/sendai2025/">https://takahiro-ina.github.io/sendai2025/</a></p> <p>3. On the Bott–Chern and Aeppli cohomology of <math>S^{2n}</math>-dimensional theta toroidal groups, The 18th Graduate Student Workshop on Mathematics, Kyungpook National University, July 28 - Aug 1, 2025), <a href="https://meeek-tiramisu-edf1b6.netlify.app">https://meeek-tiramisu-edf1b6.netlify.app</a></p>	<p>1. T. Koike, J. Tanaka, Cohomology groups with compact support for flat line bundles on certain complex Lie groups, to appear in Hiroshima Math. J (accepted, prepared for publication).</p> <p>左記集会2は国内外からの招待講演者13名を含む当該分野としては大規模な国際研究会であり、多変数関数論分野の第一人者が国際的に一堂に会した集会であった。田中氏はその招待講演者の1人である。</p> <p>左記集会3は韓国・Kyungpook National Universityで開催された国際研究会である。59人の参加者があり、数学分野では非常に大規模な集会であると言える。田中氏はこちらで招待講演者として発表を行い、そのプレゼンテーションが評価され、Award for Presentation Excellenceを受賞している。</p>
理学研究科	佐久間 駿	<p>右記の国際会議において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「Best Poster Award」を受賞した。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 標題「Structural Change in the Early Stage of Gas Adsorption on a Porous Coordination Polymer CID-5」</li> <li>・ 時間分解放射光粉末回折法により金属有機構造体 (MOF) のガス吸着初期過程の動的構造を解明した。</li> </ul>	第19回 アジア結晶学連合会議 (AsCA2025) / (2025/12/1-6)	<p>【大会概要】</p> <p>年に1回、産官学を問わず、結晶関連分野に関する研究成果の発表、議論を行うアジア地域規模の国際会議です。</p> <p>【規模】</p> <p>参加者数：約650人 ポスター発表数：約300件 Best Poster Award受賞者数：15名</p>
理学研究科	吉川 真太郎	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 標題「Cyclodextrin-Enhanced Photocatalytic Hydrogen Evolution Based on Formate Decomposition With Bio/Metal Catalysts」がWiley-VCH GmbH発行の国際誌Chemistry – A European Journal誌に掲載された。</li> <li>・ ドナー・アクセプター系光触媒、γ-グルタミル酵素及び白金微粒子からなる複合触媒系を構築し、この系を用いた光照射によるγ-グルタミルに基づく水素製造に関する研究成果を原著論文として投稿し、査読の結果掲載が決定した。</li> </ul>	国際誌Chemistry – A European Journal (Wiley-VCH GmbH発行) 掲載日：2025年12月24日	<p>【学術誌概要】</p> <p>Chemistry – A European Journal誌は、Wiley-VCH GmbHから発行され、化学のあらゆる分野を網羅する最先端の研究と総説を掲載する国際誌で30年の歴史がある。</p> <p>【規模】</p> <p>投稿原稿に対する採択率：約45% (2025年公表値)</p>
理学研究科	高柳 史奈	<p>2025年度後期にすぐれた研究成果を挙げた高柳史奈さん（理学研究科化学専攻 修士課程2年）を推薦します。近年、タンパク質が示す液-液相分離 (liquid-liquid phase separation: LLPS) が生物学や生物物理学の分野で注目されています。高柳史奈さんは、ウシ血清アルブミン (BSAタンパク質) 水溶液のLLPSを、光ピンセットを用いて時間的・空間的に制御し、単一流液を作製することに成功しました。さらに、様々な顕微イメージング・分光手法を駆使し、その渡遷の性質を明らかにしました。これらの成果は、筆頭著者として「Analyst [IF: 3.3 (2024)]」に掲載されました。光化学討論会や分析化学討論会でのポスター発表も経験しており、今後の活躍が大いに期待されます。</p>		<p>"Microanalysis of a single droplet produced by optical tweezers in an aqueous solution of bovine serum albumin"</p> <p><b>Analyst</b>, 2026, <b>151</b>, 130-136</p> <p>Article type: Paper Submitted: 30 Sep 2025 Accepted: 15 Nov 2025 First published: 18 Nov 2025</p>
理学研究科	山田 恭佑	<p>第136回触媒討論会にて「学生口頭発表賞」として選定された。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 標題「生体/光触媒複合系によるバイオマス由来化合物を原料とした生分解性ナイロン原料の可視光駆動型ワンポット合成」</li> <li>・ 光触媒と生体触媒を用い、バイオマス由来化合物であるピルビン酸と尿素を原料に、可視光エネルギー源として、生分解性ナイロン原料であるL-アラニン合成系の構築に関して口頭発表した。発表内容について座長・討論会委員等専門家による質疑応答に基づき、優れた研究と判断され、対象発表約20件のうち1件が学生口頭発表賞として表彰された。</li> </ul>	第136回触媒討論会/ (2025/9/17-19)	<p>【大会概要】</p> <p>一般社団法人触媒学会が主催する討論会で口頭発表とポスター発表とで構成されている。</p> <p>【規模】</p> <p>参加者数：6,000人 発表数：口頭発表約450件、ポスター発表約120件 受賞者数：1名（口頭発表の内発表15分・討論15分で構成されるA2講演の中（約20件）から学生口頭発表賞1名が選出される）</p>
理学研究科	平野 誠人	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 標題「Highly selective 1,4-NADH regeneration via hydrogenated NAD<sup>+</sup> analogs using a Pt/SiO<sub>2</sub> catalyst with low pressure hydrogen gas」がRoyal Society of Chemistry発行の国際誌Chemical Communications誌に掲載された。</li> <li>・ シリカゲルに担持した白金微粒子を触媒とした低圧水素ガスによるNAD<sup>+</sup>誘導体を介した選択的1,4-NADHの水素化に関する研究成果の速報成果を原著論文として投稿し、査読の結果掲載が決定した。なお、本論文の内容が評価されChemical Communications誌の表紙を飾っている。</li> </ul>	国際誌Chemical Communications (Royal Society of Chemistry発行) 掲載日：2025年10月25日	<p>【学術誌概要】</p> <p>Chemical Communications誌は、Royal Society of Chemistryから発行され、化学のあらゆる分野から、信頼性の高い研究成果を掲載している。Royal Society of Chemistryの最も引用されているジャーナルとして、60年にわたり化学界で最も信頼されているジャーナルの一つとされている。</p> <p>【規模】</p> <p>投稿原稿に対する採択率：約39% (2025年公表値)</p>

理学研究科	野村 周平	無機化学分野では著名な学術誌である英国 Royal Society of Chmeistry (王立化学会)のDalton Transactionsに論文が掲載された。当該学生は、本論文の筆頭著者で貢献度は非常に大きい。 内容：アセチル保護グルコースを導入した二座 N-ヘテロ環カルベン (bisNHC) 配位子を用いて、新規な白金二核錯体を合成した。bisNHC 配位子の架橋長を変化させることで、グルコース置換基周辺の立体反発を制御可能であることを示した。さらに、グルコース置換基が椅子型からねじり型へと柔軟に配座変化することで、錯形成を阻害するほどの立体反発が効果的に緩和されることを明らかにした。本研究の成果は、立体環境を精密に制御可能な新規機能的錯体の設計指針を提供するものと期待される。		【掲載誌】 Dalton Transactions, 2026年1月29日受理 1月31日Web掲載 DOI: 10.1039/D6DT00111 【論文情報】 タイトル: Flexible steric bulk of sugar wingtip substituents on bis(N-heterocyclic carbene) ligands of diplatinum complexes via chair-twist-boat conformational changes 著者: Shuhei Nomura, Itsuki Kobayashi, Matsumi Doe, Rika Tanaka, Tamaki Nagasawa, Takanori Nishioka
理学研究科	川端 凌弥	右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「Excellent poster award」を受賞した。 ・ 標題「Electron Density Topography (EDT) Based on Middle-Angle X-ray Scattering Data Reveals Novel Structural Insights into MAP2K6 and p38 $\alpha$ MAPK in solutions」 ・ X線中角散乱により電子密度を得るとい新規溶液構造解析により、MAP2K6及び p38 $\alpha$ MAPKのリン酸化状態やATP結合による構造変化を捉え、これらキナーゼの活性制御機構を明らかにした。 ・ 以上の発表内容、発表方法が高く評価され、審査委員の投票により選出された。	GBI学会2025年度大会/2025年10月27日～30日	【大会概要】 年に1回、産官学を問わず、創薬関連分野に関する研究成果の発表、議論を行う全国規模の学会です。 【規模】 参加者数：800人 発表数：184件 (ポスター発表含む) 受賞者数：21人
理学研究科	北野 真有	右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「優秀ポスター賞」を受賞した。 ・ 標題「MAP2K4とMAP2K6に対するスタウロスポリンの阻害活性差を生む構造差異」 ・ スタウロスポリン (STU)はATP 結合部位を埋め尽くす大環状化合物であり、MAP2K4とMAP2K6に対して500倍の阻害活性差を示す。本研究では、MAP2K4-STU複合体および MAP2K6-STU 複合体について、X線結晶構造解析およびFMO (フラグメント分子軌道法) 計算を用いた相互作用分析を行い、上述の阻害活性差を生む構造要因を明らかにした。 ・ 以上の発表内容、発表方法が高く評価され、審査委員の投票により選出された。	BioMedical Forum 2026/2025年12月11日	【大会概要】 年に1回、産官学を問わず、創薬関連分野に関する研究成果の発表、議論を行う全国規模の学会です。 【規模】 参加者数：150人 発表数：37件 (ポスター発表含む) 受賞者数：6人
理学研究科	懸山 裕希矢	右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「大会委員長賞」を受賞した。 ・ 題目「Analysis of the mechanism underlying a novel molecular property of an opsin from a reef-building coral.」 ・ 内容：サンゴの光受容タンパク質 (オプシン) が、これまでの常識とは異なる機能発現メカニズムを持つことを発見し、そのメカニズムを生み出すしくみの一端を解明した。 ・ 「研究内容の独自性及び発見の学術的価値が極めて高い」、「将来の発展が期待される」、「発表が分かりやすく、ポスターデザインに優れている」の3点において高い評価を受けた。	日本比較生理生化学会第47回早稲田大会 (2025/12/5-7)	【大会概要】 年に1回、比較生理学・生化学分野に関する研究成果の発表、議論を行う全国規模の学会です。 【規模】 参加者数：212人 発表数：55件 (ポスター発表) 受賞者数：8名、うち大会委員長賞7名
理学研究科	小林 永慈	右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「大会委員長賞」を受賞した。 発表演題: Effects of telencephalic ablation on mirror self-recognition in the cleaner fish ( <i>Labroides dimidiatus</i> ). 内容: 脳除去による鏡像自己認知能力への影響を調べることで、魚類の脳と自己意識の関係を明らかにした研究である。 評価を受けた点: 動物の自己意識と脳の関係を調べた前例のない研究であること、また、従来のヒトを対象とした研究からは得られなかった自己意識と脳の関係を示す新たな実証例であることが高く評価された。	日本比較生理生化学会 第47回早稲田大会/ (2025/12/5-7, 東京)	【大会概要】 年に1回、比較生理生化学分野に関する研究成果の発表、議論を行う全国規模の学会です。 【規模】 参加者数：212人 発表数：85件 (ポスター発表) 受賞者数：7名
理学研究科	水嶋 朱里	修士論文の研究成果が2026年2月10日に学術誌Polymer Journalに掲載された。 ・ 表題「Heat-induced structural changes in poly( $\gamma$ -glutamic acid) and the effects of alkaline conditions on its thermal stability and morphology in aqueous solution」		・ 表題「Heat-induced structural changes in poly( $\gamma$ -glutamic acid) and the effects of alkaline conditions on its thermal stability and morphology in aqueous solution」 ・ 「https://www.nature.com/articles/s41428-026-01148-7」
理学研究科	賀 彩名	右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「MBSJ Poster Award 2025」を受賞した。 ・ 標題「TGF- $\beta$ シグナルがエビシネティック修飾を介して5Hox遺伝子群の発現を誘導する仕組みの解析」 ・ 内容: 体の前後軸を決める遺伝子であるHox遺伝子群が発現するタイミングが、TGF- $\beta$ シグナルの下流でエンハンサー領域のDNAのメチル化を制御することによりコントロールされていることを発見した。 ・ 評価を受けた点: これまでHox遺伝子の発現が誘導されるメカニズムは全く不明であった。本研究により私たちの体の中でも仙椎や後肢を含む下半身の体がどのタイミングで作られるのかを分子レベルで理解するための糸口がつかめたことが高く評価された。	第48回日本分子生物学会年会/ (2025/12/5)	【大会概要】 年に1回、生物学の中でも、分子生物学分野に関する研究成果の発表、議論を行う全国規模の大規模な学会です。 【規模】 参加者数: 約7,000人 発表数: 約3300件 (ポスター発表2944件のうちポスター賞対象1599件含む) 受賞者数: 171名 (ポスター賞: MBSJ Poster Award 2025)
工学研究科	桂田 更輝	右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「学生優秀研究発表賞」を受賞した。 ・ 標題「ドップラー周波数を利用したGNSSスプーフィング検知手法の検討」 ・ 内容: GNSS信号に対するスプーフィング (なりすまし) 信号のドップラー周波数を用いた検知方法を考案し、ドローンの飛行実験により検証した。 ・ 評価を受けた点: 良い結果が得られており、ドローン等の安全運航に資すると期待できる。	令和4年度、測位航法学会主催、GPS/GNSSシンポジウム2025 (2025/12/3-5)	【大会概要】 年に1回、産官学を問わず、航法測位分野に関する研究成果の発表、議論を行う全国規模の学会です。 【規模】 参加者数：200人 発表数：16件 受賞者数：学生最優秀研究発表賞1名、学生優秀研究発表賞2名
工学研究科	逢坂 惇志	右記の国際学術誌に論文が"Featured Paper"として掲載された。 ・ 標題「Robust Navigation in Multipath Environments Using GNSS/UWB/INS Integration with Anchor Position Estimation Toward eVTOL Operations」 ・ 内容: 都市等のマルチパス環境での高精度測位のため、GNSS/UWB/INS統合システムを考案し、ドローンの飛行実験により有効性を実証した。将来の空飛ぶクルマの離発着における安全運航に資すると期待できる。	Sensors, Volume 25, Issue 24 (December-2 2025)	【学術誌概要】 Multidisciplinary Digital Publishing Institute (MDPI)のOpen Accessジャーナル CiteScore:8.2, 最大パーセンタイル:88% (Scopus)

工学部航空宇宙工学科	田上 満喜	<p>1. 右記の学生コンペティションに行った発表が、優れた内容であると評価を受け「最優秀賞」を受賞した。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 標題「CARATSオープンデータとAIが実現する次世代管制官育成プラットフォーム」</li> <li>・ 内容：本発表では、国土交通省航空局が公開する「CARATSオープンデータ」を最大限に活用し、2040年の航空交通管理（ATM）の姿を見据えた、AI駆動型の管制官教育システムを提案した。具体的には、過去の膨大な軌跡データや交信記録をAI（機械学習・深層学習）で解析し、熟練管制官の暗黙知を形式知化。訓練生がシミュレーションを行う際に、AIがリアルタイムで最適な管制指示との相違をフィードバックし、個々のスキルに合わせたパーソナライズな学習メニューを自動生成するプラットフォームの構築を提示した。</li> <li>・ 評価を受けた点：航空需要の増大と管制官不足が予測される将来において、教育の効率化と質の均一化を同時に実現する、実効性の高いビジョンである点。また、既存の教育手法に採れない斬新な切り口に加え、提案内容の具体性と緻密さが、一般的な学生発表の域を大きく凌駕していると高く評価された。</li> </ul> <p>2. 査読付き国際学会APISATでの発表</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 標題「Improving Aircraft 4D Trajectory Predictions via Machine Learning-based Forecasting of Departure Phase (SID)」</li> <li>・ 内容：CARATSデータとAIを用い、気象や滑走路選択による離陸時の不確実性を考慮した多段階予測モデルを構築。出発段階の変動要因を確率的に解析・統合することで到着時刻（ETA）の精度を劇的に向上させ、運用の効率化を実現。管制官や航空会社の意思決定支援に直結し、将来の持続可能な航空交通管理に貢献する実効性の高い研究である。</li> <li>・ 評価を受けた点：研究着手からわずか数か月で、データのクレンジングから機械学習モデルの構築、プログラム実装までを独力で完遂させた卓越した実行能力。</li> </ul>	<p>1. 第1回 CARATS2040チャレンジコンペ (2025/11/19)</p> <p>2. The 2025 Asia-Pacific International Symposium on Aerospace Technology (APISAT-2025)</p>	<p>1. 国土交通省が推進する将来の航空交通システムのあり方を定めた長期ビジョンである「CARATS（Collaborative Actions for Renovation of Air Traffic Systems）2040」が今年6月24日に公表されました。CARATS2040チャレンジコンペは、その実現に向け、2040年頃の航空交通の姿や技術的課題に対して、航空交通の発展に資する新しいアイデアを学生から募ることを目的としたコンペティションです。従来の議論の場であるCARATSオープンデータ活用促進フォーラム（今年度からCARATS2040推進フォーラム）を補完する新たな取り組みとして位置づけられ、次世代を担う学生ならではの視点や柔軟な発想を積極的に取り入れることを狙っています。</p> <p>https://www.mlit.go.jp/koku/carats/ChallengeCompeResult/Compe2025/</p> <p>参加者数：公開されていませんが、数百人程度。</p> <p>受賞者数：5件、うち最優秀賞1件</p> <p>2. APISAT:日中豪韓4カ国の航空宇宙学会が主催する航空宇宙技術に関する国際シンポジウム。参加者671人、発表476件。</p>
工学研究科	大崎 歩乃花	<p>右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「優秀講演賞」を受賞した。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 標題「低レイノルズ数における平板に設けた突起まわり流れの3次元解析」</li> <li>・ 内容：近年需要が増しているドローンが飛行する低レイノルズ数域では、流れ場に適した新たな翼型が必要とされている。そこで、ロータを模した平板にボルトテックスジュネレータという装置から着想を得た突起を設置し、空力特性への影響を3次元の数値流体計算を通じて検証した。その結果、突起により形成される剥離渦によって平板の揚力が向上する一方で、抗力も増加し、迎角ごとに突起周りの流れ場と効果的な突起の配置が異なることが判明した。</li> <li>・ 評価を受けた点：講演論文と当日の発表内容及び質疑応答が優れていた。</li> </ul>	<p>第57回流体力学講演会／第43回航空宇宙数値シミュレーション技術シンポジウム (2025/7/4)</p> <p>※受賞日：2025/8/20</p>	<p>【大会概要】年に1回、産官学を問わず、航空宇宙工学分野の流体力学/数値シミュレーションに関する研究成果の発表、議論を行う日本航空宇宙学会主催の全国規模の学会です。</p> <p>【規模】参加者数：247人 発表数：124件 受賞者数：4名</p> <p>https://nanpchi.iaass.or.jp/aerocom/ruu/ruu57/award/</p>
工学研究科	松浦 英明	<p>右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「APISAT 2025 Student Award (Excellent Student Thesis)」（学生論文賞）を受賞した。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 標題「Flow Structures and Drag Characteristics of Silt-Type Acoustic Liner Model by Large-Eddy Simulation」</li> <li>・ 内容：吸音ライナは、表面の微細孔とその下のハニカム構造セルの2層構造の薄い板であり、ファン騒音を低減する一方、空力抵抗を増加させる。本発表では、表面の微細孔の形状が空力抵抗特性に及ぼす影響を数値解析により評価した。従来形状である丸孔と新形状である長方形孔の2つのモデルに対し3次元解析を行い、マッハ数、境界層厚さを変化した計6条件を検討した。その結果、各条件において長方形孔の方が優れた空力性能を示した。</li> <li>・ 評価を受けた点：講演論文と当日の発表内容及び質疑応答が優れていた。</li> </ul>	<p>16th Asia-Pacific International Symposium on Aerospace Technology (APISAT 2025) (2025/10/28)</p> <p>※受賞日：2025/10/28</p>	<p>【大会概要】日中豪韓4カ国の航空宇宙学会が主催する航空宇宙技術に関する国際シンポジウムで、航空宇宙に関する全ての分野が網羅されており、研究成果の発表や議論が行われます。</p> <p>【規模】参加者数：671人 発表数：476件（学生発表以外も含む） 受賞者数：5名</p> <p>http://apisat.org/Data/List/A2025</p>
工学研究科	山邊 晃瑞	<p>右記の国際学会にて行った発表で優れた内容との評価を受け「WSE2025 Certificate Outstanding Oral Presentation Award」を受賞。</p> <p>表題：「Finite Element Analysis of Self-Piercing Riveting Using Coupled Eulerian-Lagrangian(CEL) Approach」</p> <p>右記の全国大会における研究発表において、発表内容及び発表の仕方の両方が優れた研究発表者として評価され、「2025年度溶接学会優秀発表賞」を受賞。</p> <p>表題：「理想化補綴法FEMを用いたCEL法によるSPRの数値解析的検討」</p> <p>右記の全国大会における研究発表において、発表したポスターの内容及び質疑応答的確さなどが評価され、「若手優秀ポスター賞 優秀賞」を受賞。</p> <p>表題：「Development of a Heat Input Model for Gas Heating Using the Idealized Explicit FEM」</p>	<p>International Seminar on Welding Science and Engineering 2025 (WSE2025) 国際会議 2025/8/10</p> <p>溶接学会2026年秋季全国大会 国内学会 2025/9/24</p> <p>令和7年 日本船舶海洋工学会 秋季講演会 国内学会 2025/11/17</p>	<p>【大会概要】本会議は「溶接科学と工学の進展」をテーマに、溶接コミュニティにおける革新に焦点を当てた2年に1度開かれる世界規模の国際会議。今回は中国北京市北京工業大学にて開催。</p> <p>【規模】発表件数：138件 受賞者：約10名</p> <p>【大会概要】「溶接・接合に関する研究の連絡を行い、学術、技術の向上普及をはかり、もって文化の発展に寄与する」ことを目的とする溶接分野において国内最大規模の国内学会。今回は新潟県燕三条地場産業振興センターにて開催。</p> <p>【規模】発表件数：171件 受賞者：約5名</p> <p>【大会概要】日本の船舶工学および海洋工学を代表する唯一の学会であり、「船舶及び海洋工学に関する学術技芸を考究し、その発達を図ることを」を目的に年2回講演会が開催される。今回は兵庫県姫路市文化コンベンションセンターにて開催。</p> <p>【規模】発表件数：18件（ポスターセッション） 受賞者：3名</p>
工学研究科	市川 亮大	<p>右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「優秀賞」を受賞した。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 標題「Study on Line Heating Planning Using Voronoi Tessellation for Arbitrary Shape Formation」</li> <li>・ 内容：近年、海運における運賃競争の激化を背景に、燃費向上のため流体抵抗の小さい船体形状が求められている。数値計算力学の高度化により、船体設計では複雑な三次元曲面を扱う機会が増えている一方、製造現場の線状加熱は熟練者の経験に依存し、技術伝承が課題である。そこで本研究では、ボロノイ分割を用いて加熱線配置を自動決定するシステムを構築し、熟練作業の機械化による任意形状曲面製作の効率性・再現性向上を目指す。</li> <li>・ 評価を受けた点：本研究は、線状加熱における技能伝承の課題に対し、Voronoi分割を用いたひずみ集約手法を導入することで、熟練作業者の加熱計画を数理的に再現する方法を提案した点が評価された。板形状に依存せず各加熱線に必要なひずみを合理的に集約でき、任意形状鋼板への適用可能性を示した。さらに船体外板モデルでFEM解析により形状精度を定量的に確認し、実用性と工学的有用性、自動化・技能継承への貢献が期待される成果である。</li> </ul>	<p>日本船舶海洋工学会令和7年秋季講演会/ (2025/11/17)</p>	<p>【大会概要】年に1回、船舶海洋工学分野に関する研究成果の発表、議論を行う全国規模の学会です。</p> <p>【規模】参加者数：447人 発表数：18件 受賞者数：3名、うち最優秀賞1名 など</p>
工学研究科	牛田 廉	<p>右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「Student Award (Best Poster Presentation)」を受賞した。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 標題「Toluene Removal Using Dry and Wet Plasma Reactors」</li> </ul>	<p>10th East Asia Joint Symposium on Plasma and Electrostatic Technologies for Environmental Application (EAPETEA-10) (2025/12/3-5)</p>	<p>【大会概要】2012年の第1回以降、日本、韓国、中国で開催されている、環境分野に関するプラズマ技術および静電気技術について研究成果の発表、議論を行う国際学会です。</p> <p>【規模】参加者数：90人（日本、韓国、中国、米国） 総発表数：76件（ポスター発表含む） 受賞者数：4名、うちポスター賞2名</p>
工学研究科	樋口 芽以	<p>右記の学会において行った発表で、毎年、複数の色彩に関連する国際会議におけるポスター発表の中から数件が選ばれ授与される国際的なAward「Robert W G Hunt International Poster Award」を受賞した。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 標題「Observation of Color and Gloss Change during Drying of Particulate Suspension in Polymer Solution Using a Noncontact 2D Colorimetric System with Dome Illumination」</li> <li>・ 内容 本学で開発中の装置を改良し、乾燥中の塗料およびスラリー膜の光沢と色彩の経時変化の定量測定に成功したこと</li> <li>・ 評価を受けた点 発表ならびに研究の質とポスターのデザインが大変優れていると評価された</li> </ul>	<p>16th Congress of the International Colour Association (2025.10.19-10.24)</p>	<p>【大会概要】2年に1回、色彩分野に関する研究成果の発表、議論を行う学際的な国際会議</p> <p>【規模】参加者数：200人以上（24カ国以上） 発表数：210件（ポスター発表約90含む） 受賞者数：3名</p>
工学研究科	黒加 拓海	<p>この学生の研究成果は、日本ロボット学会誌に3件の査読付き論文が掲載され、優秀と認められるため推薦する。</p>		<p>題目「ワイヤ駆動式ミミズ型ロボットの旋回移動に関する研究」（第一著者）、2025/11/6公開</p> <p>題目「野縁受けを含む経路を走破可能な変曲線開式ストッパー付きワイヤ駆動式ミミズ型ロボットの開発」（第一著者）、2026/1/9掲載決定(公開日未定)</p> <p>題目「段差乗り越え性能を向上するための小径車輪を有する簡易構造ワイヤ駆動式ミミズ型ロボット」（第二著者）、2025/12/1公開</p>
工学研究科	谷 達哉	<p>右記の学会において行った発表が、優れていると評価を受け「若手優秀発表賞」を受賞した。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 標題「中大規模木造接合部における金物結露の評価 その1 実測調査と熱解析」</li> <li>・ 内容 中大規模木造建築の接合部において、冬季に外部の低温の影響を受けた基礎直結金物が表面結露を生じさせるかどうかを確認するため、実建物における実測調査とそれをもとに熱解析を行ったもの。</li> <li>・ 右記の学会において発表を行った。</li> <li>・ 右記の学会はPeer Reviewがあり、査読を通過しProceedingsに掲載された。</li> <li>・ 標題「DEVELOPMENT OF SIMPLE SEISMIC REINFORCEMENT METHOD OF TRADITIONAL WOODEN APPLICATION OF LATTICE BEARING WALL」</li> <li>・ 内容 伝統的木造建築に斜め格子耐力壁を入れて耐震補強をする構法の改良開発研究。</li> </ul>	<p>2025年度日本建築学会大会（九州）学術講演会 / (2025/9/9-12)</p> <p>World Conference on Timber Engineering 2025</p>	<p>【大会概要】年に1回、産官学を問わず、建築学分野に関する研究成果の発表、議論を行う全国規模の学会です。</p> <p>【規模】参加者数：10,000人（全部門） 選考対象者数：538件（上記のうち環境工学部門における選考対象者） 受賞者数：61名</p> <p>【大会概要】2年に1回、産官学を問わず、木質構造分野に関する研究成果の発表、議論を行う世界規模の学会です。</p> <p>【規模】参加者数：参加者950人、発表発表730人</p>
工学研究科	山東 美心	<p>筆頭著者である学術論文（査読付き）1編が都市計画学会の学術誌に掲載された。学会の全国大会にて口頭発表を行った。口頭発表を行った学会の大会名称を右に記す。</p> <p>・ 論文の内容：昨今、「居心地の良く歩きやすくなるまちなか」の形成が都市政策上の課題となっている状況を踏まえ、大阪市内のメインストリートに接する「横道」を対象に、街路景観を構成する景観要素と景観印象評価の関係を定量的に解析し、横道の特徴づける景観要素を解明した研究である。</p>	<p>日本都市計画学会 2025年度全国大会（第60回論文発表会） (2025/11/14-16)</p>	<p>【著者】山東美心・高木悠里・轟名光市</p> <p>【標題等】『メインストリートに接続する横道景観の印象評価に関する研究-雑波・心斎橋-本町を対象として』、日本都市計画学会、都市計画論文集、60(3)、pp1116-1123、2025年10月。</p> <p>【全国大会の概要・規模】年に1回開催。発表件数170編程度</p>

工学研究科	福本 雄大	筆頭著者である学術論文(査読付き)1編が都市計画学会の学術誌に採択、掲載された。学会の全国大会にて口頭発表を行った。口頭発表を行った学会の大会名称を右に記す。 ・論文の内容:都市計画法に基づく市街化調整区域の維持・活性化に向けて、神戸市の市街化調整区域における開発規制の緩和と移住施策の詳細や経緯、実績等を調査・分析し、移住の実態を踏まえ、移住促進の要因の解明を行った研究である。	日本都市計画学会 2025年度全国大会(第60回論文発表会) (2025/11/14-16)	【著者】 福本雄大・高木悠里・高名光市 【標題等】 『神戸市の市街化調整区域における開発許可基準の緩和と移住促進の要因に関する研究』、日本都市計画学会、都市計画論文集、60(3)、pp1758-1765、2025年10月。 【全国大会の概要・規模】 年に1回開催、発表件数170編程度
工学研究科	森原 淳	被推薦者が第一著者となった学術論文が、American Institute of Physics of Applied Physics Letters 誌に掲載された。また、同論文はEditor's pickにも選出された。 ・標題: Effects of high-temperature annealing on electrical properties of Si-doped $\beta$ -Ga <sub>2</sub> O <sub>3</sub> thin films grown by low-pressure hot-wall MOCVD ・著者: Jun J. Morihara, Mao Bando, Junya Yoshinaga, Yoshinao Kumagai, and Masataka Higashiwaki ・内容: MOCVD成長したn-Ga <sub>2</sub> O <sub>3</sub> 薄膜において、高温アニール処理により電気的特性の大規模な改善が可能であることを見出し、その改善効果について詳細に調査、考察した。		【学術論文情報】 Jun J. Morihara, Mao Bando, Junya Yoshinaga, Yoshinao Kumagai, and Masataka Higashiwaki, "Effects of high-temperature annealing on electrical properties of Si-doped $\beta$ -Ga <sub>2</sub> O <sub>3</sub> thin films grown by low-pressure hot-wall MOCVD," Appl. Phys. Lett. <b>127</b> , 142105 (2025); doi: 10.1063/5.0292471
工学研究科	岡田 淳之	右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「第11回OP/優秀講演賞」を受賞した。 ・標題「量子ドコヒーレンスと励起子輸送を考慮したInGaN/GaN多重量子井戸の発光高速化メカニズムの解明」 ・従来の局所的なSP増強理論では説明できない多重量子井戸(MQW)の発光の寿命短縮の物理的起源を解明するため、エネルギー高速輸送モデルと協調発光モデルの2つを立案し、Lindblad master方程式による数値計算モデルを構築した。本モデルを用いて数値解析を行い、井戸間のコヒーレント結合を考慮した協調発光モデルが深部の井戸にまで及ぶ寿命の短縮を正しく記述できることを明らかにした。 ・評価を受けた点: 数値計算モデルを構築し、多重量子井戸の発光寿命の短縮の起源がプラズモン促進型協調発光であると解明した点。また、協調状態の構築が多層構造を活用した高効率なプラズモニックデバイスを開発するための有効な設計指針となる点。	Optics & Photonics Japan 2025 (OPJ2025) (2025/12/9-11)	【大会概要】 ナノフォトニクス、量子光学、情報フォトニクス、視覚光学、光計測、生体医用光学、光学設計、X線・EUV光学など光科学から産業応用までの光に関わる幅広い領域を対象とした光関係では国内最大級の学術講演会です。3日間にわたり開催され、一般講演に加え、OPTICAやSPIEなどの特別講演や海外学会からの招待講演による国際シンポジウム、国内の様々な学会との合同シンポジウムも行われました。 【規模】 発表数: 口頭約300件、ポスター約100件 受賞者数: 優秀講演賞13名
工学研究科	小島 和綺	右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「スチューデントアワード」を受賞した。 ・標題「アップコンバージョン型有機発光ダイオードの発光特性における長鎖アルキル置換基の効果」 ・内容 低電圧駆動するアップコンバージョン型有機発光ダイオードに関して、可溶性フルオロレン誘導体のアルキル置換基をドナー/アクセプター界面でスペーサーとして用いることにより発光における損失が大幅に低減され、高輝度化に成功した。 ・評価を受けた点 研究課題の新規性が高く、主張を裏付ける十分な実験結果が示されたことが評価された。	第22回 薄膜材料デバイス研究会/ (2025/10/23-24)	【学会概要】 年に1回、薄膜半導体・絶縁体・電極材料・それらの物理・エンジニアリングに関する研究成果の発表、議論を行う全国規模の学会です。 【規模】 参加者数: 114人 発表数: 49件 (ポスター発表含む) 受賞者数: 5名、うちスチューデントアワード賞3名 など
工学部情報工学科	高石 康世	右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「感覚代行研究奨励賞」を受賞した。 ・標題「視覚障害者による写真鑑賞のための深度推定に基づく2.5Dレリーフの生成と編集」 ・内容: コンピュータビジョン技術の発展により、自然画像1枚から高精度の深度推定を行うことが可能になった。この技術を応用することで、写真をもとにした2.5Dレリーフの自動生成が実現できる。しかし、このように生成されたレリーフは、必ずしも触覚に向いているとは限らない。例えば、写真全体にわたる網などの物体(障害物)が前景にある場合、その背後の物体の触覚が阻害されてしまい、十分に写真の情報を伝達することができないという問題が考えられる。そこで我々は、深度情報に基づく分解手法を提案する。これは自動生成されたレリーフを複数のレイヤーに分割し、前景の遮蔽物を取り除くことを可能にするものである。予備実験の結果、この障害物の除去によってレリーフの明瞭さと使いやすさが大幅に向上し、認知的負荷を軽減することが示された。	第51回 感覚代行シンポジウム/(2025/12/2)	【大会概要】 感覚代行シンポジウム(Sensory Substitution Symposium)は、感覚代行、視覚補助、聴覚補助、盲聾教育、高齢者等に関するもの、またはそれ等の基礎についての討論を行う場として感覚代行研究会が主催するシンポジウムです。1975年に第1回が開催され、以後毎年12月上旬に二日間にかけて開催されています。感覚代行に興味のある人なら誰でも御参加頂けます。例年は約100名の参加者と、約30件の一般講演、1~2件の特別講演があります。
工学研究科	山本 勇大	右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「優秀発表賞」を受賞した。 ・標題「低リソースIoTデバイス上での並列モデル予測制御: 主問題解による双対問題解算と最適性判定」 ・複数の感りソースIoTデバイスへ、モデル予測制御を並列実装する手法において、解の精度保証と計算時間の低減を実現させる方法を提案している。 ・内容の新規性・有用性、プレゼンテーション技術	第68回 自動制御連合講演会 (2025/11/1, 2025/11/2)	【大会概要】 年に1回、産官学を問わず、制御工学関係の研究者・技術者の研究成果の発表、議論を行う全国規模の学会です。 【規模】 参加者数: 520人程度(推定値) 発表数: 350件程度(口頭発表) 受賞者数: 33名
工学研究科	吉松 真宏	右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「YPC優秀発表賞」を受賞した。 ・標題「分布巻SPMSMにおけるヨーク幅がトルク質量比・出力質量比に及ぼす影響の検討」	2025年電気学会産業応用部門大会/(2025/8/19~21)	【大会概要】 年に1回行われる電気学会産業応用部門の全国大会です。 【規模】 参加者数: 1339名 発表数: 140件(YPC: Young engineer Poster Competitionとして、大会の全講演件数は560) 受賞者数: 14名
工学研究科	井上 達貴	右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「Best Oral Presentation Award」を受賞した。 ・標題「Stable Maximum Torque per Flux Control for Direct Torque Control」	28th International Conference on Electrical Machines and Systems (ICEMS 2025), Busan, Korea / (2025/11/16-19)	【大会概要】 開催国を変えながら年に1回行われる電気機械とそのシステムに関する国際会議です。 【規模】 参加者数: 894名 発表数: 714件 受賞者数: 78名
工学研究科	太田 翔心	光ファイバ関連の国際学術論文誌Journal of Engineering Research and Sciencesにマルチコアファイバに関する研究"Cross-Sectional Structure of Nested Antiresonant Nodeless Fiber for Single-Mode and Few-Mode Transmission"が採録された。2025年12月23日にアクセプトされ、Open Accessで2026年1月23日より論文が公開されている。		オープンアクセスURL <a href="https://www.jenrs.com/v05/01/p003/">https://www.jenrs.com/v05/01/p003/</a>
工学研究科	宮地 雄輝	右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「優秀賞」を受賞した。 ・標題「マイクロリアクターを志向した界面光架橋反応による酸化還元応答性高分子カプセルの作製」 ・内容: 界面光架橋反応という独自技術を利用して、酸化還元刺激に応答可能な高分子カプセルを開発し、マイクロリアクターへの利用可能性を明らかにすることに成功した。 ・評価を受けた点: 優れた学術研究発表を行ったことが評価された。	ラドテック研究会 第1回若手ポスター発表会 (2025/11/4)	【大会概要】 光反応や光反応性材料に関する研究成果の発表・議論を行う全国規模の国内学会です。 【規模】 参加者数: 150人 発表数: 48件(ポスター発表含む) 奨励賞受賞者数: 10名
工学研究科	山下 美里	被推薦者が第一著者となった学術論文が、American Chemical SocietyのLangmuir誌に掲載された。 ・標題「Construction of Robust Cross-Linked Polymer Shells in Interfacial Photocycloaddition Polymerization: Trifunctional vs Tetrafunctional Monomers」 ・著者「Misato Yamashita, Yukiya Kitayama, Atsushi Harada」 ・内容: 完全天然物由来低分子化合物から分解性高分子カプセルを直接合成可能な界面光架橋付加重合における光反応性基の影響を詳細に調査した。		【学術論文概要】 Construction of Robust Cross-Linked Polymer Shells in Interfacial Photocycloaddition Polymerization: Trifunctional vs Tetrafunctional Monomers Misato Yamashita, Yukiya Kitayama, Atsushi Harada Langmuir, in press DOI:10.1021/acs.langmuir.5c05258

工学研究科	松本 大輝	右記の国際学会において行ったポスター発表が、優れた内容であると評価を受け「Best Poster Award」を受賞した。 ・ 標題「Preparation of highly-sensitive FRET-based nanoemulsion optode for anion detection by using fluorescent dye liquid」 ・ 内容：新規に開発した蛍光性色素液体材料を使った超高感度アニオンセンサー開発に関する研究であり、従来法に対し約十数倍の高感度化および色素-アニオン認識分子間相互作用が分析性能に与える効果を核磁気共鳴分析等で明らかにした。	RSC-JAIMA Symposium on Analytical Chemistry 2025 (2025/9/4-5)	【大会概要】 年に1回、産官学を問わず、分析化学分野に関する研究成果の発表、議論を行う世界規模の国際学会です。 【規模】 参加者数：約200人 ポスター発表数：98件 ポスター受賞者数：10名 【備考】賞状授与者に指導教員名が入っていますが、国際学会実行委員長だったためであり、審査には関与していません。
工学研究科	富士 海斗	右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「日本MRS第35回年次大会奨励賞」を受賞した。 ・ 標題「チオノフタリド誘導体のミニエマルジョン系ラジカル開環重合による主鎖分解性高分子微粒子の合成」 ・ 内容：チオノフタリド誘導体をミニエマルジョン系ラジカル開環重合に適用することに初めて成功し、主鎖分解性高分子微粒子の合成に成功するとともに、圧力効果による開環重合の促進を世界で初めて明らかにした。 ・ 評価を受けた点：優れた学術研究発表を行ったことが評価された。	日本MRS第35回年次大会 (2025/11/10-11/12)	【大会概要】 高分子化学・界面化学を含む材料科学に関する研究成果の発表、議論を行う全国最大規模の国内学会です。 【規模】 参加者数：617人 発表数：542件（ポスター発表含む） 奨励賞受賞者数：13名
工学研究科 物質化学系生命系専攻 応用化学分野	浮田 紗希	右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「Best Poster Presentation」を受賞した。 ・ 標題 「Stimuli-Responsive Cyclometalated Platinum(II) Complexes Bearing Alkoxy Groups with Various Lengths」 ・ 内容 シクロメタル化白金(II)錯体に長鎖アルコキシ基を導入した新規化合物を3種合成した。これらの化合物について、外部刺激により誘起されるモルフォロジー変化と、それに伴う発光挙動の変化を調査した。その結果、刺激応答性発光特性の発現における分子設計の重要性を示唆する知見を得るとともに、刺激応答性材料に対する分子設計指針を提案した。	12th East Asia Symposium On Functional Dyes & Advanced Materials/ (2025/9/24-2025/9/26)	【大会概要】 機能性色素・先端材料分野に関する研究成果の発表、議論を行う国際学会です。 【規模】 参加者数：101名 発表数：77件（ポスター発表含む） 受賞者数：7名
工学研究科	宮地 龍一	右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「優秀ポスター賞」を受賞した。 ・ 標題：二点架橋型アントラセン連結体による光アップコンバージョン過程のスピニング制御 ・ 内容：二点架橋型アントラセン連結体による光アップコンバージョン過程のスピニングについて評価した。	第15回CSI化学フェスタ2025/(2025/10/22-24)	【大会概要】 年に1回、産官学を問わず、化学分野に関する研究成果の発表、議論を行う全国規模の学会です。 【規模】 参加者数：2,700人 発表数：1,031件（ポスター発表） 受賞者数：188名
工学研究科	橋井 貴士	右記の論文が国際的学術誌「Journal of the American Chemical Society」にアクセプトされた。「Journal of the American Chemical Society」は、American Chemical Society(ACS)が発行する化学分野で世界最高峰レベルとされる国際的で非常に厳格なピアレビュー付き学術誌である。		【論文詳細】 "Synthesis of Li <sub>10</sub> GeP <sub>5</sub> S <sub>12</sub> Electrolyte Using Aqueous Solution" T. Hashii, H. Tanigaki, H. Sakashita, H. Kowada, K. Motohashi, A. Sakuda, and A. Hayashi J. Am. Chem. Soc.(2026). <a href="https://doi.org/10.1021/jacs.5c16397">https://doi.org/10.1021/jacs.5c16397</a> Accepted: Jan 12
工学研究科	今井 重太郎	右記の学会において行った研究発表が、優れた内容であると評価を受け「優秀ポスター賞」を受賞した。 ・ 発表題目「(NH <sub>4</sub> ) <sub>2</sub> MoS <sub>4</sub> の熱分解によって作製した非晶質多硫化セリブデンの構造解析と正極特性」  右記の学会において行ったポスター発表が、優れた内容であると評価を受け「優秀ポスター賞（1位）」を受賞した。 ・ 発表題目「熱分解法を用いた非晶質MoS <sub>2</sub> の作製と全固体電池用正極への応用」  右記の国際学会において行ったポスター発表が、優れた内容であると評価を受け「Chemistry Today Outstanding Poster Award」を受賞した。 ・ 発表題目「Amorphous MoS <sub>4</sub> with Cluster-Like Local Structure for Energy Storage Materials」  右記の論文が国際的学術誌「Inorganic Chemistry」に掲載された。  「Inorganic Chemistry」は、アメリカ化学会(ACS, American Chemical Society)が発行する査読付き国際的学術誌で、無機化学分野に関する論文を対象としている。	日本セラミックス協会 第56回ガラス部会若手セミナー/ (2025/8/25-27)  学術変革A「イオン流測学」第4回若手の会/ (2025/11/13)  The 2nd International Symposium on Solid State Chemistry (ISSCC2025)/(2025/12/1-5)	【要約】 年に1回、学生およびガラス研究に関わる研究者の数を対象とした全国規模の講演会セミナー。最新のガラス研究を語る、ガラス研究の最新動向から最先端の技術まで紹介する講演、企業紹介、研究発表、ポスター形式による研究発表のセッションもある。 【規模】 参加者数：100名 学生ポスター発表数：41件 受賞者数：2名 【要約】 2024-2026年度 学術変革領域研究(A)「イオン流測学」-イオン流の非平衡性と無偏運動の解明による材料デザイン変革-プロジェクトで、材料科学と数値科学の研究者が協働して電解質材料/輸送材料におけるイオン流測の応用を明らかにし、それを制御するための物質設計指針を導く研究成果発表セミナー(2回)を行う全国規模の研究集会です。 【規模】 参加者数：不明 ポスター発表数：20名 発表数：3名(優秀ポスター賞1名(1位)1名(第1-3位まで表彰)) 【大会概要】 年に1回、無機化学分野における最先端の進展を議論する国際学会です。 【規模】 参加者数：不明 ポスター発表数：185件(うちポスター賞対象数：100件) 発表数：Chemistry Today Outstanding Poster賞5名(他、優秀ポスター賞3部門各5名) 【論文詳細】 "Amorphous MoS <sub>3</sub> Derived from (NH <sub>4</sub> ) <sub>2</sub> MoS <sub>4</sub> : Structural Insights and Applications in All-Solid-State Batteries" K. Inai, K. Kato, T. Shigemoto, M. Tani, T. Funakawa, H. Yamada, K. Motohashi, A. Sakuda and A. Hayashi Inorg. Chem., 64 (3) 19007-19013 (2025). <a href="https://doi.org/10.1021/acs.inorgchem.5c03122">https://doi.org/10.1021/acs.inorgchem.5c03122</a> Accepted: Aug 29, 2025/Revised: Sep 8
工学研究科	上永 誠人	(1) 右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「優秀ポスター発表賞」を受賞した。 ・ 標題「機械学習支援によるジチエノナフトチアゾール半導体の分子設計と光フロー合成」 ・ 内容：効率的な有機半導体材料の開発を目的とし、機械学習の結果を活用して新規有機半導体分子を合成しその基礎物性評価を行った。  (2) 右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「優秀賞」を受賞した。 ・ 標題「機械学習支援による有機半導体の分子設計とそのフロー-光化学合成および反応機構解析」 ・ 内容：機械学習で設計した新規有機半導体をフロー-光反応により位置選択的に合成し、反応機構を活性種の違いから議論した。	(1) 日本化学会秋季事業 第15回 CSI化学フェスタ 2025. (2025/10/22-24) (2) 第5回分子光機能研究会. (2025/11/08)	(1) 【大会概要】 産官学を問わず、素材・環境・エネルギーからヘルスケアに至る最先端の化学技術について、研究成果の発表、議論を行う全国規模の学会です。 【規模】 参加者数：約2700人 発表数：1031件（ポスター発表） (2) 【大会概要】 有機・無機・量子・生命科学など多岐にわたる光化学分野の中で、特に「分子」に焦点を当て、励起状態の振る舞い・反応性・機能性について議論を深める全国規模の研究集会です。 【規模】 参加者数：約50人 発表数：17件
工学研究科	西里 栄敏	右記の学会(1)において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「優秀学生発表賞（ポスター）」を受賞した。 標題：“Slow” Singlet Fission Induced by Weak Electronic Coupling 内容：非共役リンカーで連結したテトラセンの遅い分子内-重項分裂について評価した。  右記の学会(2)において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「優秀ポスター発表賞」を受賞した。 標題：弱い電子的カップリングが誘起する“遅い”分子内-重項分裂 内容：非共役リンカーで連結したテトラセンの遅い分子内-重項分裂を引き起こす弱い電子的カップリングについて評価した。  右記の学会(3)において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「優秀講演賞」を受賞した。 標題：双環性リンカーをもつ新規テトラセン二連結体の分子内-重項分裂 内容：双環性リンカーで連結したテトラセンの遅い分子内-重項分裂について評価した。	(1) 2025年光化学討論会/ (2025/9/4-6)  (2) 日本化学会春季事業 第15回CSI化学フェスタ 2025/ (2025/10/22-24)  (3) 日本エネルギー学会関西支部 第70回研究発表会・石油学会関西支部 第34回研究発表会/ (2025/12/12)	(1) 日本化学会秋季事業 第15回 CSI化学フェスタ2025. (2025/10+16/22-24) (2) 第5回分子光機能研究会. (2025/11/08)

工学研究科	朝倉 大智	右記の論文が国際的学術誌『Chemistry of Materials』にアクセプトされた。『Chemistry of Materials』は、American Chemical Society(ACS)が発行する材料化学分野のトップクラスの国際的なピアレビュー付き学術誌である。		【論文詳細】 "Oxygen- and Fluorine-Doped Li <sub>2</sub> PS <sub>4</sub> Glass-Ceramic Electrolytes Compatible with Lithium Metal Electrodes for All-Solid-State Batteries" T. Asakura, R. Izawa, S. Sato, T. Kimura, C. Hotehama, H. Kowada, K. Motohashi, A. Sakuda, M. Tatsumisago and A. Hayashi Chem. Mater. (2026). <a href="https://doi.org/10.1021/acs.chemmater.5c02634">https://doi.org/10.1021/acs.chemmater.5c02634</a> Accepted: Jan 14
工学研究科	島居 真人	右記の論文が国際的学術誌『The Journal of Physical Chemistry C』に掲載された。 『The Journal of Physical Chemistry C』は、アメリカ化学会(ACS, American Chemical Society)が発行する査読付き国際学術誌で、物理化学の中でも特にナノ材料、エネルギー、電子材料に関連する研究を扱う専門誌である。 右記の論文が国際的学術誌『Material Advances』に掲載された。 『Materials Advances』は、英国王立化学会(Royal Society of Chemistry, RSC)が発行するオープンアクセス(OA)の査読付き国際的学術誌で、材料科学分野の幅広い研究を対象としている。		【論文詳細】 "First-Principles Investigation of Mechanical Properties and Anisotropy of Argyrodite Li <sub>6</sub> PS <sub>5</sub> Cl Crystal Electrolytes" M. Torii, Y. Okita, K. Motohashi, A. Sakuda and A. Hayashi J. Phys. Chem. C, 129 [39] 17882-17891 (2025). <a href="https://doi.org/10.1021/acs.jpcc.5c05116">https://doi.org/10.1021/acs.jpcc.5c05116</a> Accepted: Aug.27, Published: Sep.17  【論文詳細】 "Elastic Properties of Diverse Sodium-Ion Conductive Materials: A First-Principles Study" M. Torii, A. Sakuda, K. Motohashi, A. Hayashi Mater. Adv., 2, 484-494 (2026). <a href="https://doi.org/10.1039/d5ma00912j">https://doi.org/10.1039/d5ma00912j</a>
工学研究科	土居 勇太	右記の学会において行ったポスター発表が、優れた内容であると評価を受け「優秀ポスター賞」を受賞した。 ・発表題目「Na <sub>5</sub> Fe <sub>3</sub> S <sub>4</sub> 正極活性物質の合成と電気化学的特性評価」 右記の論文が国際的学術誌『Batteries & Supercaps』に掲載された。 『Batteries & Supercaps』は、Wiley-VCH Verlag(ドイツ)が発行する電気化学的エネルギー貯蔵に関する国際的なピアレビュー付き学術誌である。	日本化学会 電気化学ディビジョン 化学電池材料研究会 第54回講演会・夏の学校/(2025/8/26-27)	【大会概要】 年に1回、産官学を問わず、化学電池材料分野に関する最先端の講演、研究成果の発表および議論を行う合宿形式の全国規模の学会です。 【規模】 参加者数：73名 学生ポスター発表数：53件 受賞者数：5名  【論文詳細】 "Na <sub>5</sub> Fe <sub>3</sub> S <sub>4</sub> as High-Capacity Positive Electrode Active Material for All-Solid-State Sodium Batteries" Y. Doi, T. Otono, Y. Fujita, R. Kato, M. Torii, J. Ding, S. Mori, K. Motohashi, A. Sakuda and A. Hayashi Batteries & Supercaps, 00, e202500551, 1-8 (2025). <a href="https://doi.org/10.1002/batt.202500551">https://doi.org/10.1002/batt.202500551</a> Published: Nov 2
工学研究科	入井 駿	Journal of Materials Chemistry Cに論文が掲載された。 ・標題：The role of a [2,2]paracyclophane moiety in piezofluorochromism of crystalline organoboron complexes ・著者事項：Irii, S.; Ogaki, T.; Yamamoto, S.; Miyashita, H.; Nobori, K.; Iida, H.; Ozawa, Y.; Abe, M.; Sato, H.; Matsui, Y.; Ikeda, H. J. Mater. Chem. C, 2026, 14, 232-242. ・内容：シクロファンを有する有機ホウ素結体の発光の圧力依存性を評価した。 ・オンライン掲載日：2025/10/20		ジャーナル名：Journal of Materials Chemistry C インパクトファクター：5.2 (2024年) 出版社：The Royal Society of Chemistry
工学研究科	福田 侑真	右記の学会において行ったポスター発表が、優れた内容であると評価を受け「BCSJ Award」を受賞した。 ・標題「高い対称性をもつ有機二核ホウ素結体の“等方的ブリックワーク”結晶構造」	第18回 有機π電子系シンポジウム/ (2025/12/12-13)	【大会概要】 年に1回、有機π電子系化合物に関する研究成果の発表、議論を行う全国規模の学会です。 【規模】 参加者数：約100人 発表数：60件(ポスター発表含む) 受賞者数：9名、うちBCSJ Award2名 など
工学研究科	和田 佳成太	Asian Journal of Organic Chemistryに論文が掲載された。 ・標題：Magic Blue-Promoted Synthesis of a Highly Planar Tetraphenylbenzidine: Evaluation of Its Fundamental Properties and Unraveling the Intriguing Mechanism for Its Formation ・著者事項：Wada, K.; Kuramoto, Y.; Ogaki, T.; Sakata, T.; Matsui, Y.; Okada, K.; Sato, H.; Ikeda, H. Asian J. Org. Chem, 2025, 14, e00458. ・内容：アミニウム塩 (Magic Blue) を用いて合成した平面性の高いテトラフェニルベンジジンの生成機構の解明および基礎物性評価を行った。 ・オンライン掲載日：2025/8/14		ジャーナル名：Asian Journal of Organic Chemistry インパクトファクター：2.7 (2024年) 出版社：Wiley International
工学研究科	山本 幸永	右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「シンポジウム賞(プレゼンテーション賞)」を受賞した。 ・標題「感環境負荷を目標した農業封入PLGAナノ粒子の合成」	化学工学会 第90年会 (2025/10/15)	【大会概要】 年に1回、産官学を問わず、化学工学分野に関する研究成果の発表、議論を行う全国規模の学会です。 【規模】 参加者数：1,000人程度 発表数：50件程度 受賞者数：10件程度
工学研究科	井上 義文	右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「優秀発表賞」を受賞した。 ・標題：「メタノール産化性酵母のrDNA遺伝子座への複製遺伝子組込みによるβ-カロテン生産」 ・内容：メタノール産化性微生物であるKomagataella phaffiiを用いたメタノールからのβ-カロテン生産に成功した。 ・評価を受けた点：メタノールを原料とした微生物によるβ-カロテン生産に関する報告例は極めて少なく、研究内容がユニークであった点、自身の研究結果について背景知識も含め習熟しており、質問者と有意義な質疑応答をおこなえた点	2025年度カロテノイド若手の会/ (2025/11/8)	【大会概要】 年に1回、産官学を問わず、カロテノイドに関する研究成果の発表、議論を行う全国規模の学会です。 【規模】 参加者数：約100人 発表数：36件(ポスター発表含む) 受賞者数：4名
工学研究科	今吉 優輔	右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「化学工学会 粒子・流体プロセス部会シンポジウム賞」を受賞した。 ・標題「ジャンプテストを用いた粉体圧縮時における粘性挙動の理解」	化学工学会第56回秋季大会 (2025/9/16-18)	【大会概要】 年に2回、産官学を問わず、化学工学に関する研究成果の発表・議論を行う全国規模の学会です。 【規模】 対象口頭発表数：109件 受賞者数：9名
工学研究科	土岐 雄人	右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「Excellent Poster」賞を受賞した。 表題「Solvato/Vapochromism-Based Alcohol Sensing by Metal-Organic Framework Thin Films with Coordinatively Unsaturated Metal Sites」	The 2nd International Frontier Interdisciplinary Forum on Crystalline Porous Particles (IPOPAP2)/ (2025/11/18)	【大会概要】 結晶性多孔質材料をはじめとした「粒子科学」に関する研究成果の発表、議論を行う国際学会です。 【規模】 発表数：52件(ポスター発表含む)

工学研究科	GEBREKIDAN MELES ZENAWI	筆頭著者として学術論文が国際誌（出版社Royal Society of ChemistryのNanoscale誌(Impcat factor: 5.1)）に掲載された。		【論文タイトル】「Enhancing water release in atmospheric water harvesting systems by mixing oligomeric liquids with metal-organic framework」 DOI: 10.1039/D5NR03820K
工学研究科	平山 優佳	<p>本学生は、右記の査読付き国際学術誌において、第一著者として、全反射蛍光X線分析法 (TXRF) を用いた薄片試料の新規元素分析手法に関する研究成果を発表した。</p> <p>本研究成果は、国際的に評価の高い学術誌に掲載された原著論文であり、本学の共用機器を有効に活用し、物質分析機器の新たな応用研究を報告するとともに、バイオ工学の分野で新規の知見を報告するものである。本学の高い研究力を対外的に示す成果であるとともに、学術的独創性および実用性の両面で高い評価を受けた点において、本表彰事業の趣旨に合致するものである。</p> <p>【研究内容】 本研究では、ミクロトームを用いて作製したブロッコリー薄片試料に対し、化学的前処理を行うことなく全反射蛍光X線分析 (TXRF) を直接適用する新規分析手法を提案した。従来のTXRF分析では、溶媒化や分解処理などの複雑な前処理を要することが多く、薄片試料への適用は困難であった。本研究では、ミクロトームによる均一な薄片化に着目し、乾燥・非破壊で微量元素分析を可能とする分析方法を確立した。さらに、物分析手法との比較検討を通じて定量結果の信頼性を検証するとともに、試料内の局所的な元素濃度差を評価可能であることを実証した。</p> <p>【評価された点・学術的意義】 本研究成果は、ミクロトーム薄片とTXRF分析を組み合わせた分析手法としての新規性を有する。試料調製時間を大幅に短縮し、非破壊分析を実現した実用性に加えて、局所的な元素分布評価への応用可能性を実証した点が高く評価され、査読付き国際学術誌への掲載に至った。 特に、本手法は、植物試料を対象とした環境科学分野において、ファイブレメディエーション技術の評価や環境汚染動態解析への応用可能性を有する点で学術的価値が高く、今後の発表が期待される成果である。</p>		<p>【学術誌情報】 題目：Direct Total Reflection X-Ray Fluorescence Analysis of Thin Broccoli Sections Prepared Using Microtome 著者：Yuka Hirayama (第一著者) ,Kouichi Tsuji 掲載誌：X-Ray Spectrometry Volume 54, Issue 6, 805-812 出版年月：2025年11/12月号として発行（査読付き国際学術誌） X-Ray Spectrometryは、Wiley社が刊行する査読付き国際学術誌であり、Web of Scienceに掲載され、高いImpact Factorを有する、X線分析・分光分析分野において長年高い評価を受けている専門誌である。本誌は、分析化学・材料科学・環境科学分野の研究者に広く読まれており、国際的な研究成果の発信媒体として確立された評価を有する学術誌である。</p>
工学研究科	津山 紗江里	<p>右記の学会において行った発表（英語口頭発表）が、優れた内容であると評価を受け「優秀学生発表賞（口頭）」を受賞し、さらにRSC Chemical Science Presentation Prizeにも選ばれました。</p> <p>・発表タイトル：Photochromic properties of aza-diarylethenes with fused heterocycles at the ethene bridge moiety ・発表内容、プレゼンテーション、質疑応答すべての点において高い評価を受け、「優秀学生発表賞（口頭）」受賞者5名の中でも特に優秀な発表に贈られるRSC Chemical Science Presentation Prizeに選出された。</p>	2025年光化学討論会/(2025/9/4～2025/9/6)	<p>【学会概要】 年に1回、産官学を問わず、光化学分野に関する研究成果の発表、議論を行う全国規模の学会です。</p> <p>【規模】 参加者数：638人 発表数：10件（受賞講演）、115件（一般口頭発表）、290件（ポスター発表） 受賞者数：5名（口頭）、11名（ポスター）</p>
農学研究科	松本 朋子	<p>右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「ポスター賞」を受賞した。</p> <p>・標題「シロイヌナズナアクチン脱重合因子の欠損は細胞核内アクチン繊維の構造を変化させる」 ・内容「アクチン繊維は、主に細胞質内で物質輸送や細胞形態制御などに働く細胞骨格である。動物細胞における近年の研究では、細胞核の中にもアクチン繊維が存在し、遺伝子発現やDNA損傷修復などの様々なイベントを制御することがわかっていく。一方、植物では細胞核内アクチン繊維に関する報告はなく、細胞核内アクチン繊維の存在と機能が真核生物で保存されているのかどうかは明らかになっていない。本発表では、モデル植物シロイヌナズナを用いた研究において、植物の細胞核内にもアクチン繊維が存在すること、アクチン結合タンパク質の一つであるアクチン脱重合因子が細胞核内アクチン繊維の構造を制御することによって、病害応答や植物成長、老化などの植物生理機構に関連する遺伝子の発現を制御している可能性を報告した。」 ・評価を受けた点「細胞核内アクチン繊維は、2013年に国際学術誌Scienceにおいて動物細胞におけるその存在と機能が報告されて以来、細胞内の新たな構造として大きな注目を集めている。しかしながら、植物においては未だに細胞核内アクチン繊維の存在と機能に関する報告はない。本研究は、植物における細胞核内アクチン繊維の存在を初めて示したものであり、細胞核内アクチン繊維の普遍性・重要性を示すことにより、細胞生物学・形態学の発展に大きく貢献する点を高く評価した。」</p>	第37回 日本植物形態学会/ (2025/9/17)	<p>【大会概要】 年に1回、植物形態分野に関する研究成果の発表、議論を行う全国規模の学会です。</p> <p>【規模】 参加者数：110人 発表数：70件 受賞者数：3名</p>
農学部	榎木 雅弥	<p>右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「若手ポスター発表優秀賞」を受賞した。</p> <p>・標題「シロイヌナズナにおいて亜鉛取り込みを担う主要なZIPトランスポーターの同定とその亜鉛依存的なエンドサイトーシスによる分解」 ・内容：植物の必須栄養素である亜鉛を取り込む主要なトランスポーターを同定し、その発現が亜鉛に応答した分解により制御されることを明らかにした。 ・評価を受けた点：遺伝学的に確かな方法でシロイヌナズナにおける主要な亜鉛取り込みを担うトランスポーターを同定し、その発現制御パターンを詳細に解析した。</p>	日本土壌肥科学会2025年度新潟大会/ (2025/9/17-9/19)	<p>【大会概要】 年に1回、産官学を問わず、土壌・肥料・植物栄養分野に関する研究成果の発表、議論を行う全国規模の学会です。</p> <p>【規模】 参加者数：およそ1,000人 発表数：494件（ポスター発表260件を含む） 若手ポスター発表優秀賞受賞者数：18名 若手口頭発表優秀賞受賞者数：17名</p>
農学研究科	永井 翔大	<p>研究活動の成果が、国際的学術誌Frontiers in Plant Scienceに掲載された。</p> <p>・表題「Genome-shock deletion of a hybrid lethality gene breaks a reproductive barrier and facilitates speciation in <i>Nicotiana</i>」 ・内容：交配によって得られた植物が遺伝的に枯死する現象である雑種致死は、交雑育種の重要課題となっている。本論文では雑種致死を乗り越えて、多くの雑種後代を生み出せる交雑組合せを発見した。さらに、種間交雑時に雑種に起こる「ゲノムショック」と呼ばれる染色体の変化によって雑種致死の原因となる遺伝子が欠失し、雑種致死の克服につながることを解明した。本内容について大学HPでプレスリリースした。</p>		<p>国際的学術誌：Frontiers in Plant Science タイトル：Genome-shock deletion of a hybrid lethality gene breaks a reproductive barrier and facilitates speciation in <i>Nicotiana</i> 掲載日：2025年11月19日</p>
農学研究科	小林 春香	<p>右記の学会において行った発表が、優れた発表であると評価を受け「優秀ポスター発表賞」を受賞した。</p> <p>・標題「イオン交換水を用いたミストがハウス栽培キュウリの収量に及ぼす影響」 ・内容 ハウス栽培キュウリにおいて節差制御に用いるミスト噴霧にイオン交換水を使用しることによって、収量増加効果が得られ、その効果は、ミストが正に帯電することによる植物体への付着率と蒸発速度の増加によるものであることを証明した。 ・評価を受けた点 など 発表内容、プレゼンテーション、質疑応答において、審査の結果、優れていると評価された。</p>	日本生物環境工学会2024年大阪大会/ (2024/9/19)	<p>【大会概要】 年に1回、産官学を問わず、環境調節を応用する新しい農業生産の技術開発および技術形成に関する研究成果の発表、議論を行う全国規模の学会です。</p> <p>【規模】 参加者数：約500人 発表数：78件（ポスター発表）、45件（口頭発表） 受賞者数：2名</p> <p>※推薦対象期間外の推薦について 指導教員の確認業務により、 2025年度【前期】推薦期間に、推薦票の提出が無かった為、 運用規則第3条第3項「やむを得ない事情により表彰が受けられなかったものについては、学長の判断により次回の表彰の時期に併せて行うことがある」 に該当する事柄として扱います。（学生課事務局）</p>
農学研究科	永澤 藍香	<p>右記の学会において行った発表が、優れた発表であると評価を受け「Best Oral Presentation Award」を受賞した。</p> <p>・標題「Effects of the Ratio of NO<sub>3</sub>-N and NH<sub>4</sub>-N in the Nutrient Solution on the Growth and Nutrient Uptake of Wasabi」 ・内容 ワサビをアクアポニクスに適用するための基礎的知見として、培養液中のアンモニア態窒素濃度による影響を評価し、比較的高いアンモニア耐性を持っていることを明らかにした。 ・評価を受けた点 など 発表内容、プレゼンテーション、質疑応答において、優れていると評価された。</p>	2025 International Symposium on Innovation and Industrial Perspectives in Smart Greenhouse and Vertical Farming System in Asia (2025/11/7)	<p>【大会概要】 年に1回、日中韓の施設栽培および植物工場に関する研究者が集まり、技術開発および技術形成に関する研究成果の発表、議論を行う国際シンポジウムをKorean Society for Bio-Environment Controlとの合同開催したものです。</p> <p>【規模】 参加者数：約400人 発表数：46件（口頭発表）、169件（ポスター発表） 受賞者数：5名</p>

農学研究科	久米 晴音	右記の学会において発表したところ、優れた内容であると評価を受け「学生優秀発表賞」を受賞した。 ・ 標題「 <i>Burkholderia cepacia</i> complexが産生する細菌ポリリン糖cepacin類の構造訂正」 ・ 内容「細菌ポリリンcepacin類の構造の誤りを示し、新たにneocepacin類として平面構造を決定した。さらに本化合物がcollimonin類と最終酸化反応によって作り分けられることを明らかにした。」 ・ 評価を受けた点「発表内容と質疑応答が優れていた」	日本農芸化学会 2025年度 関西・中四国・西日本支部合同大会/(2025/9/18-19)	【大会概要】 日本農芸化学会の関西・中四国・西日本の3支部による合同大会。最新の研究成果の発表と議論が行われました。 【規模】 参加者数：409人 発表数：115件（口頭発表） 受賞者数：11名（学生優秀発表賞） 【学術雑誌】 Testosterone deficiency synergistically exacerbates fructose-induced hepatic steatosis through gut microbiota and pyruvate in mice Takahashi H, Harada N, Hayamizu Y, Dungubat E, Nakazawa M, Kitakaze T, Sugimoto K, Inui H, Yoshihara E, Takahashi Y, and Yamaji R. Am. J. Physiol. Endocrinol. Metab. 303, E233-E246, 2026. プレスリリース: <a href="https://www.omsu.ac.jp/info/research_news/entry-22241.html">https://www.omsu.ac.jp/info/research_news/entry-22241.html</a>
農学研究科	高橋 央樹	右記の研究論文が学術誌に第一著者として掲載され、プレスリリースを行った。 【American Journal of Physiology-Endocrinology and Metabolism】は、American Physiological Societyが発行する国際的学術誌であり、1898年に創刊されたAmerican Journal of Physiologyを起源とする長い歴史と伝統を持つ。	Published online: 2026/1/6	【大会概要】 年に1回、化学に関して産学官の研究者が集まり研究成果の発表、議論を行う全国最大規模の学会です。 【規模】 参加者数：2,700人 発表数：1,031件（ポスター発表のみ） 受賞者数：10名
農学研究科	三枝 直樹	右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「最優秀ポスター発表賞（CSIフェスタ賞）」を受賞した。 ・ 標題「位置遷移する銅中心を持つ人工金属リアーゼの創製」 ・ 内容：金属活性中心が動く新規性の高い立体選択的なマイケル付加反応を触媒する酵素に関する機能解明を行った。 ・ 評価を受けた点：1) 研究に対して発表者が十分に寄与していること、2) 質疑応答に優れていること、3) 独自性が認められ、今後の発展が期待できること	日本化学会秋季事業 第15回CSI化学フェスタ2025 (2025/10/22-24)	【大会概要】 年に1回、産官学を問わず、農業農村工学分野に関する研究成果の発表および議論を行う大会。開催担当が支部であるため、研究発表会名には「支部」という名称が入っているが、参加者は全国から集まっており、例年100件近い発表件数があり、実質的には全国大会規模の発表会である。 【規模】 参加者数：257人 発表数：85件（口頭発表のみ） 受賞者数：12名、うち研究奨励賞3名
農学研究科	安倍 亮太	右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「研究奨励賞」を受賞した。 ・ 標題「SPAC的観点から水収支を考慮した樹体の水ストレス評価の試み」 ・ 内容：土壌-植物-大気連続系（SPAC）の水収支を考慮したモデルを構築し、クンシュウミカン樹体の水ストレスの定量化を試みたものである。開発したモデルによって計算された葉の水ポテンシャルは実測値とよく一致し、高い推定精度が示された。 ・ 評価を受けた点：現時点では、長期的な推定精度にはまだ課題が残されるものの、将来的に本手法が確立されれば農業分野における水資源管理の効率化に大きく寄与するという点で高く評価された。	第82回農業農村工学会京都支部研究発表会/ (2025/11/18)	【大会概要】 年に1回、チョウとガに関する研究成果の発表、議論を行う全国規模の学会です。 【規模】 発表数：27件（ポスター発表含む） 受賞者数：4名、うち優秀発表賞2名
農学研究科	岸本 里菜	右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「ポスター賞優秀発表賞」を受賞した。 ・ 標題「オオゴマダラに対するマダラヤドリバエの寄生適合性」 ・ 内容：マダラヤドリバエ（以下本種）はチョウ目幼虫に広く寄生する寄生バエであるが、同じマダラチョウ類であっても寄生が成立する種としない種がいる。オオゴマダラは過去にマダラヤドリバエによる寄生例が報告されていないが、植物上に産卵を行う本種は重要な天敵となりうる。本研究では、オオゴマダラに対する本種の寄生可否とその防衛機序について、野外調査と室内実験を行い検証した。	日本結核学会第71回東京大会 (2025/10/26)	【大会概要】 年に一度、チョウとガに関する研究成果の発表、議論を行う全国規模の学会です。 【規模】 発表数：27件（ポスター発表含む） 受賞者数：4名、うち優秀発表賞2名
農学研究科	久井 花恋	右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「最優秀発表賞」を受賞した。 ・ 標題「クロツバメシジミの翅色と配偶行動における外来寄生植物の影響」 ・ 内容：クロツバメシジミ <i>Tangia fischeri</i> は、岩場や河川敷に生息するが、開発などによって生息地が減少し、環境省の準絶滅危惧に選定されている。本種の幼虫は、主に在来種のツメレンゲを利用するが、近年、外来のマンネンサ属の利用が各地で確認されている。本研究では、本種幼虫を在来、外来植物で寄主植物で飼育し、羽化した成虫の翅の反射スペクトルを比較するとともに、外来植物の利用にともなう配偶行動や繁殖への影響について検証した。	日本結核学会第71回東京大会 (2025/10/25-2025/10/26)	【大会概要】 年に1回、産官学を問わず、獣医学の再生医療分野に関する研究成果の発表、議論を行う国際学会です。 【規模】 参加者数：150人 発表数：30件（口頭発表を含む） 受賞者数：4名（うち、ポスター賞1名） 【学術雑誌】 Regenerative Therapy タイトル：Recombinant production of canine vitronectin for optimizing the culture of canine induced pluripotent stem cells
農学研究科	弘岡 拓人	右記の学会において、これまでの研究活動が評価を受け「奨励賞」を受賞した。 ・ 標題「クビアカツヤカミキリの総合的防除技術の開発に関する研究」 ・ 内容：バラ科樹木の害虫である外来種クビアカツヤカミキリの化学的・物理的防除手法を開発し、それらの有効性を実証した。 ・ これらの成果は、本種の総合防除において基盤技術となると考えられ、応用昆虫学分野の発展に大きく寄与した。	第37回 日本環境動物昆虫学会年次大会/ (2025/11/15)	【大会概要】 「奨励賞」は、年に1名、若手研究者が受賞する。 【規模】 参加者数：300人 受賞者数：年に1名
獣医学研究科	高見 優生	博士課程の研究成果を、筆頭著者として、国際的評価の高い学術誌に発表した。 ・ 表題「Systemic aldehyde storm induced by allyl alcohol exposure results in extensive hepatic ferroptosis in <i>Alh2</i> <sup>-/-</sup> Z <sup>2</sup> knock-in mice」 ・ 学術誌名: Free Radical Biology & Medicine ・ 番号: 239, 177-188 ・ 発行日: 2025年7月30日 ・ 学内広報: <a href="https://www.omsu.ac.jp/info/research_news/entry-19444.html">https://www.omsu.ac.jp/info/research_news/entry-19444.html</a>		掲載されたFree Radical Biology & Medicine誌は、Scopus収録誌のTOP10%ジャーナルである（93パーセンタイル; IF8.2）。
獣医学研究科	志々田 康平	右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「Best Poster Award」を受賞した。 ・ 標題「Evaluation of recombinant canine vitronectin for canine iPSC maintenance and differentiation」 ・ 内容：犬臓器発現系を用いたイヌ由来Vitronectin蛋白質の作製を行い、イヌiPSC細胞培養へ使用可能であることを明らかにした。 2025年9月に学術誌Regenerative Therapyに掲載され、本学でプレスリリースされた。	North American Veterinary Regenerative Medicine Association Annual Conference 2025 (2025/9/16-19)  Shishida K, Ikuta Y, Sugisaki H, Kimura K, Katsuhira J, Tsukamoto M, Hatoya S, Regen Ther. 2025 Sep 16;30:751-759. doi: 10.1016/j.reth.2025.09.002. PMID: 41020059; PMCID: PMC12475865.	【大会概要】 年に1回、作業療法学分野に関する研究成果の発表、議論を行う、作業療法学の全国最大規模の学会です。 【規模】 参加者数：5,000人 発表数：1,100件（ポスター発表含む） 受賞者数：6名、最優秀発表賞1名、優秀発表賞5名
リハビリテーション学研究科	上野 慶太	右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「優秀演題賞」を受賞した。 ・ 標題「慢性広範囲痺痛におけるeLORETAを用いた脳機能的結合の解析結果」 ・ 客観的な脳波指標で中枢神経系の機能変化を捉え、従来の主観的報告中心の評価から脱却し、脳機能レベルでのアプローチを示した。 ・ 作業療法学の研究活動並びに臨床の発展に寄与すると評価された。	第59回 日本作業療法学会/ (2025/11)	【大会概要】 年に1回行われる全国の作業療法士学会です。本年度は作業療法法の価値を高めるエビデンスの創出が大会テーマです。 【規模】 現地参加者は、3200名(別にオンデマンド配信あり)。演題数は、口述212題、ポスター1284題。受賞者は、口述発表から4名、ポスター発表から2名が優秀演題賞を受賞しました。
リハビリテーション学研究科	大川 阿紀子	右記の学会において行ったポスター発表が、優れた内容であると評価を受け、「優秀演題賞」を受賞した。 表題:「地域在住者における睡眠と重要な作業の特性との関連」 内容:地域在住者766名を対象に、個人にとって重要な作業の特性と睡眠の質の関連を調査し、重要な作業の種類、実行度、領域等が睡眠の質に影響を与えており、性別や年齢によって特性が異なることを明らかにした。 評価された点:医療分野で対策の必要性が高まっている睡眠に対して、個人の作業の特性の観点から関連を調査した研究はこれまでになく、新規性が高いこと、信頼性の高い指標を使用した大規模調査を行った点を評価された。	第59回日本作業療法学会(2025/11/7-9)	【大会概要】 年に1回、産官学を問わず、獣医学の再生医療分野に関する研究成果の発表、議論を行う国際学会です。 【規模】 参加者数：300人 発表数：27件（ポスター発表含む） 受賞者数：4名、うち優秀発表賞2名

リハビリテーション学研究所	藤原 志帆	<p>右記の学会において行った発表が、学術的に優れた内容であると評価を受け、「学術大会奨励賞」を受賞した。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・標題「帝王切開術後における理学療法士による早期離床と術後イレウス発生抑制の関連」</li> <li>・内容 帝王切開術後患者を対象に、理学療法士が術後2時間以内に実施する早期離床介入と術後イレウス発生抑制との関連について検討した。理学療法士による術後リスク評価に基づく安全な離床支援が、術後イレウスおよび有害事象の低減に寄与する可能性を示した。</li> <li>・評価を受けた点 術後合併症に対する回復管理プロトコルのコホート調査研究として、帝王切開後であること、理学療法士介入についての検討、術後イレウスに着目しているという3つの観点において新規性があり、臨床的意義の高い研究として評価を受けた。</li> </ul>	第11回日本ワイメンズヘルス・メンズヘルス理学療法学会学術大会/ (2025/12/13-14)	<p>【大会概要】年に1回、ワイメンズヘルス・メンズヘルス理学療法分野に関する研究成果の発表、議論を行う全国規模の学会です。</p> <p>【規模】参加者数：約800人（対面・オンラインのハイブリッド開催） 発表数：104件（ポスター発表含む） 受賞者数：3名、うち学術大会長賞1名、学術大会優秀賞1名、学術大会奨励賞1名</p>
生活科学研究科	王 曉銳	<p>景観と雰囲気機械学習モデルを不動産物件データに適用し、住宅家賃を正確に推定する新手法を開発した。成果はHabitat Internationalに掲載された。</p> <p>起床前に自然光を浴びると目覚めの質が向上することを解明した。成果は<i>Building and Environment</i>に掲載された。</p>		<p>Xiaorui Wang, Jihui Yuan, Yangcheng Gu, Daisuke Matsushita, Explaining housing rents: A neural network approach to landscape image perceptions, <i>Habitat International</i>, Volume 155, 2025, 103250, ISSN 0197-3975, <a href="https://doi.org/10.1016/j.habitatint.2024.103250">https://doi.org/10.1016/j.habitatint.2024.103250</a>, CiteScore 10.9, Maximum Percentile 98%, 6/288, Urban Studies</p> <p>Xiaorui Wang, Yangcheng Gu, Jihui Yuan, Daisuke Matsushita, Natural light control to improve awakening quality, <i>Building and Environment</i>, Volume 273, 2025, 112733, ISSN 0360-1323, <a href="https://doi.org/10.1016/j.buildenv.2025.112733">https://doi.org/10.1016/j.buildenv.2025.112733</a>, CiteScore 14.3, Maximum Percentile 97%, 18/841, Geography, Planning and Development</p>
生活科学研究科	北村 和津	<p>「43rd WORKSHOP ON URBAN AND TERRITORIAL CREATIVITY OF CERGY-PONTOISE, ILE-DEFRANCE」に参加するために、テーマに沿った個人作品を提出し、100を超える応募の中から選出された。</p> <p>世界各国から都市計画分野の学生や若手専門家15名が選出され、国際的な専門家やパートナーとともに、パリ郊外セルジーポントワーズ大学で、20日間の国際ワークショップに参加した。ワークショップでは各国参加者とチームを組んで活動し、その成果を国際審査委員会の前で発表した。</p>	<p>国際ワークショップ名称 43rd WORKSHOP ON URBAN AND TERRITORIAL CREATIVITY OF CERGY-PONTOISE, ILE-DEFRANCE</p> <p>テーマ The River Seine as a Great Garden: The Sources, Ecology &amp; Habitability of the Seine and its Tributaries</p>	<p>Les Ateliersは1982年に設立されたフランスの非営利団体で、世界各地で専門家、学生、若手専門家など、さまざまな国や背景を持つ世界各国の人々を集め、都市開発に関する国際ワークショップを開催する活動を行っている。「43rd WORKSHOP ON URBAN AND TERRITORIAL CREATIVITY OF CERGY-PONTOISE, ILE-DEFRANCE」は、設立以来毎年9月に開催されている国際都市ワークショップであり、セルジー・ポントワーズ市、ヴァル・ドワーズ県、地域都市計画研究所、都市計画省、パリ地方金融公社などが後援している。セルジー・ポントワーズ大学、エセック・ビジネススクール、セルジー・パリ美術学校などの高等教育機関とも提携している。</p>
生活科学研究科	濱崎 友翔	<p>卒業研究の内容を米田化学会の農業食品化学部門のジャーナルに発表した（論文添付） 論文名：Enhancement of Antioxidant Activity of Isorosmanol in Aqueous Micellar Solution by a Cysteine Thiol* ACS Food Sci Technol, 5, 4199-4210 (2025) 著者：Hamasaki, Tomoka; Masuda, Toshiya</p>		<p>ジャーナル名：ACS Food Science &amp; Technology (American Chemical Society)</p>
生活科学研究科	野田 彩加	<p>座面が360度揺れる新しいタイプのオフィスチェアについての作業員に対する影響を人間工学的に評価した研究が高い評価を受け、国際誌Safetyに掲載された。この研究では、座面が360度揺れるオフィスチェアをVDT作業において一定時間使用した場合や種々の異なる姿勢で使用した場合に作業員の心身に与える影響を筋電図、動作解析、主観評価などの多角的な観点から評価し、従来の一般的なオフィスチェアと比較して有効な可能性を示した。 掲載誌：Safety (Impact Factor 1.7, Q2 (Safety Research)) 表題：Effects of Using a 360-Degree Swaying Chair on Physical Workload During VDT Work</p>		<p>Noda, S., Doi, T., Yamashita, K. (2025) Effects of Using a 360-Degree Swaying Chair on Physical Workload During VDT Work, <i>Safety</i>, 11(4), 11040124.</p>
生活科学研究科	上江洲 恵梨	<p>右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「若手学会発表賞」を受賞した。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・標題「幼児における菓子類の摂取量が栄養素等摂取量に及ぼす影響と栄養学的評価」</li> <li>・全国6ブロックの主要都市に所在する保育所に通う幼児を対象に食事記録法に基づく食事調査を実施し、幼児の菓子類の摂取量が栄養素等摂取量に及ぼす影響と栄養学的評価を行った。</li> <li>・幼児にとって朝食の摂取に必要な栄養素を獲得するうえで重要であるが、菓子類の摂取による影響を詳細に検討した研究が限られていたため、高い評価を得た。</li> </ul>	第72回 日本栄養改善学会学術総会 (2025/9/14)	<p>【大会概要】年に1回、実践的な栄養学分野に関する研究成果の発表、議論を行う全国規模の学会です。</p> <p>【規模】参加者数：2,000人 発表数：800件（ポスター発表含む） 受賞者数：10名、うち若手学会発表賞10名 など</p>
生活科学研究科	舟 雄	<p>建築・都市分野におけるエネルギー性能向上および熱環境緩和をテーマとして、国際的に高く評価される研究成果を継続的に発表している。</p> <p>特に、太陽光発電（PV）、BIPV、屋上緑化、日射遮蔽などを統合した建築外皮・都市環境の最適化に関する研究において、理論的検討とシミュレーション分析を組み合わせた高い独創性と実用性を示している。</p> <p>在学中にJCR-Q1 (SCIE) に分類される国際学術誌に3編の査読付き論文を第一著者として掲載しており、研究の質・量の両面から極めて優れた業績を有するため、表彰候補者として強く推薦する。</p>		<p>以下の国際的に評価の高い査読付き学術誌（すべてSCIE/JCR-Q1）に、第一著者として論文を掲載している。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>Solar Energy (Impact Factor: 6.6, Elsevier, JCR-Q1)</li> <li>Integrated PV, Green Roofs, and BIPV Screens for Energy and Heat Mitigation in Osaka</li> <li>本研究では、大阪市を対象として、太陽光発電（PV）、建築一体型太陽光発電（BIPV）、屋上緑化および日射遮蔽スクリーンを統合した建築・都市スケールでのエネルギー削減効果および熱環境緩和効果を定量的に評価しており、都市環境工学分野において高い実用性と学術的価値を有する。</li> <li>Energy Nexus (Impact Factor: 9.5, Elsevier, JCR-Q1)</li> <li>Optimization of energy-efficient residential building design in Japan: A climate-responsive approach under current and future scenarios</li> <li>日本の住宅建築を対象に、現在および将来の気候変動シナリオを考慮した省エネルギー設計の最適化手法を提案した研究であり、建築エネルギー分野および気候応答型設計に関する国際的な議論に貢献している。</li> <li>Results in Engineering (Impact Factor: 7.9, Elsevier, JCR-Q1)</li> <li>Shading Effects on Building Energy Performance: A Multi-City Analysis</li> <li>日本国内複数都市を対象として、日射遮蔽が建築エネルギー性能に及ぼす影響を比較分析した研究であり、地域差を考慮した建築設計指針の検討に資する成果である。</li> </ol> <p>いずれの論文も、国際的に広く引用される主要学術誌に掲載されており、舟氏の研究成果は建築環境工学分野において国際的に高い評価を受けている。</p>

他3名

【大阪市立大学】					
学部・学科 Faculty・Department 学域・学類 College・School 研究科 Graduate school	氏名 Name	推薦理由・成績(功績の内容) Reasons for Recommendation	【学会等における受賞等の場合に記入】 国際大会または国内大会 International competition or National competition / (開催年月日 date)	その他参考事項 Others <small>※学術誌であれば、タイトルや大要の掲載・掲載などを記載してください If it is an academic journal, please include the title, scale and outline of the conference, etc.</small>	
文学研究科	王 青	<p>右記1の学会において行った発表をもとに、同学会の機関誌（右記2）へ投稿した論文が、国際水準の厳しい査読を通り、多数の投稿論文のうち唯一の掲載論文となった。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・論文標題「初期芥川龍之介の文体形成－イェーツ翻訳における時刻めぐって」</li> <li>・要約：芥川龍之介が翻訳したイェーツ作品の時間構造に着目し、明治末期から大正初期にかけての時刻の使用を考察したうえで、英文学とその翻訳が芥川の文体形成に与えた影響を明らかにした。</li> </ul>	<p>1. 第19回国際芥川龍之介学会ISAS台湾大会 (2024年11月16日(土)・17(日) 於台湾 輔仁大学)</p> <p>2. 国際芥川龍之介学会ISAS機関誌「芥川龍之介研究」第19号、2025年8月31日発行</p>	<p>【大会概要】年に1回、日本近代文学および芥川龍之介に関する研究成果の発表、議論を行う国際学会で、主に海外開催。</p> <p>【論文採択率について】王青の論文が掲載された「芥川龍之介研究」第19号については、投稿論文数6本、採用は王青の1本のみで採択率17%であることが公表されている。（五島慶一「学会的な、余りに学会的な－国際芥川龍之介学会の〈沿革〉」(「日本近代文学」第113号2025年10月)より)</p>	

医学研究科	藤仁朝格社	<p>筆頭著者として、微生物学分野の国際的学術誌mBioに優れた研究成果を発表した。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 標題 「Benefits and costs of a hypercapsule and the mechanism of its loss in a clinical isolate of <i>Acinetobacter baumannii</i>」</li> <li>・ 内容 日和見感染菌として医学的に重要な<i>A. baumannii</i>の臨床分離株において、荚膜過剰産生型から荚膜欠損型へと再現性高く転換する現象を発見し、そのメカニズムを解明した。また、両荚膜型は、血清殺菌抵抗性、乾燥耐性、抗菌薬耐性、バイオフィルム形成能、および低酸素条件下での増殖優位性に明確な違いがあり、表現型の変化が環境適応に寄与し得ることを明らかにした。</li> <li>・ 評価を受けた点 薬剤耐性菌の代表格である<i>A. baumannii</i>において、未知の環境適応メカニズムを発見・解明した点が高く評価され、米国微生物学会が発行する国際的に評価の高い査読付き学術誌mBioに掲載された。本研究は、診断・治療方針の検討や細菌の持続感染機構の理解に重要な知見を提供するものである。</li> </ul>		<p>【学術誌概要】 mBioは、米国微生物学会 (American Society for Microbiology) が発行する査読付きの国際学術誌であり、微生物学分野全般を対象として、基礎から臨床まで幅広い研究成果を掲載している。国際的に高い評価を受けている主要学術誌の一つである。</p> <p>【掲載論文情報】 掲載誌：mBio 論文タイトル：Benefits and costs of a hypercapsule and the mechanism of its loss in a clinical isolate of <i>Acinetobacter baumannii</i> 掲載年：2025年 (Online ahead of print) Article ID：e02366-25 DOI：10.1128/mbio.02366-25 PMID：41459967</p>
-------	-------	---	--	--

他1名

【大阪府立大学】

学部・学科 Faculty・Department 学域・学域 College・School 研究科 Graduate school	氏名 Name	推薦理由・成績(功績の内容) Reasons for Recommendation	【学会等における受賞等の場合に記入】 国際大会または国内大会 International competition or National competition ／(開催年月日 date)	その他参考事項 Others ※学術誌であれば、タイトルや大会の規模・概要などを記載してください If it is an academic journal, please include the title, scale and outline of the conference, etc.
工学域 機械系学類	山本 航平	<p>右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「優秀発表賞」を受賞した。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 標題「数値解析手法を用いた摩擦接合に関する力学的検討」</li> <li>・ 【内容】摩擦接合における接合中および接合後の力学挙動は極めて複雑であり、力学状態を解明することは非常に有用である。そこで本研究では、数値解析手法を用い、接合メカニズムと施工パラメータの影響について力学的に検討した。</li> <li>・ 【評価を受けた点】様々な解析結果を分析し、各現象の力学的メカニズムを説明したことが評価をうけた。</li> </ul>	<p>2025年度 軽金属溶接協会 研究成果発表会 (2025/12/03)</p>	<p>【大会概要】 年に1回、軽金属の溶接・接合分野に関する研究成果の発表、議論を行う、若手研究者を対象とした全国規模の学会です。</p> <p>【規模】 参加者数：50人程度 発表数：18件 受賞者数：4名</p>
獣医学類	上山 さくら	<p>右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「ポスター賞優秀賞」を受賞した。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 標題「UV-LEDによる水中の病原性原虫の不活化効果 -クリプトスポリジウムに対するin vitroおよびin vivo評価試験-</li> <li>・ 水係条約の発効により水銀殺菌灯に替わる不活化装置が喫緊で求められている中、水銀殺菌灯に近い波長ではなく、高波長のUV-LEDランプが塩素に耐性を有する原虫に対して有効である事を初めて提示し、今後、高波長のLEDが代替装置となる根拠を示した。</li> <li>・ 試験管内での不活化評価のみならず、構築した感染モデルを用いて、原虫株をマウスに投与し、完全な不活化率を実証した点等が評価された。また、本賞は複数の審査員の投票により審査されるが、極めて多くの票数を得た。</li> </ul>	<p>第52回日本防菌防黴学会 年次大会/ (2025年9月24日～26日)</p>	<p>【大会概要】 年に1回、産官学を問わず、食品や環境等の多くの領域における衛生や感染症等、幅広い病原体や微生物に関わる研究成果の発表、議論を行う全国規模の学会です(会員数約1,500名)。</p> <p>【規模】 参加者数：おおよそ1,000人 発表数：987件 (ポスター発表含む) ポスター賞受賞者数：3名、うち優秀賞1名</p>

<団体>

【大阪公立大学】

<b>功績</b> Achievement プログラムにより 達成してきた 【研究実績】 学業【Studies】 社会的貢献【Social contribution】 その他【Other】	<b>団体名</b> Name of Team	<b>構成員氏名(代表者に○)</b> Member's Name (Representative, ○)	<b>ふりがな</b> Furigana
研究活動	経済学部・同済ゼミ：Aチーム	○大阪公立大学 経済学部 織福 朋成 大阪公立大学 経済学部 中野 夏弓 他1名	かきふく ともたか なかの あゆみ 他1名
研究活動	Team AAM	○大阪公立大学 工学研究科 今本 光祐 大阪公立大学 工学部 岡野 友哉 大阪公立大学 工学研究科 進士 景星	いまもと こうすけ おかの ともや しんじ ひろとし